

2021 年度通常枠＜第 1 回＞・実行団体・イノベーション企画支援事業

地域循環再生経済を支える 『みみず』的人材の育成事業 事後評価報告書

株式会社みみずや
2025 年 3 月 12 日 提出



目次

1. 報告書要約.....	1
2. 基本情報.....	3
(1) 実行団体名	3
(2) 実行団体事業名	3
(3) 資金分配団体名	3
(4) 資金分配団体事業名	3
(5) 実施期間.....	3
(6) 事業対象地域	3
3. 事業総括.....	4
(1) 解決すべき課題	4
(2) 期待される変化、事業の目的	5
(3) 課題解決に向けた具体的手法	8
(4) 事業実績とアウトカムの発現	10
(5) 結論	10
(6) 今後の活動と課題.....	10
(7) 提言	11
(8) 自己評価.....	11
4. 事業計画概要.....	12
(1) 事業によって解決を目指す社会課題	12
(2) 最終受益者、直接対象グループとその人数	15
(3) 事業の概要(中長期アウトカム、短期アウトカム、活動の概要)	15
(4) 事業で目指した出口・持続化戦略の概要.....	25
5. 事後評価実施概要	26
(1) 実施概要.....	26
(2) 実施体制(内部/外部、評価担当役割、氏名、団体・役職)	26
(3) 実施時期.....	26
6. 事業の実績.....	27
(1) インプット.....	27
(2) 活動とアウトプットの実績	28

(3) 外部との連携の実績	51
7. アウトカムの分析	66
(1) アウトカムの達成度	66
(2) 波及効果(想定外、波及的・副次的効果)	90
(3) 出口戦略・事業の持続化に向けた戦略の成果	90
(4) 事業の効率性	91
8. 成功要因・課題	92
(1) 【生き方や働き方に悩む地域の若者】	92
(2) 【新たな学びの場を求める子ども】	92
(3) 【地域の創造的な対話の場】	92
(4) 【地域資源】	92
(5) 【関連企業】	93
9. 結論	94
(1) 社会的インパクト評価の構成要素別自己評価	94
(2) 自己評価の判断根拠について	94
10. 本事業で取り扱った活動を発展させるための提言	96
11. 事業からの学び・知見・教訓	97
12. 資料(別添)	98

1. 報告書要約

本事業は、地域に根付く伝統的な価値観や同調圧力が、特に若者や子どもたちの生きづらさを生み出しているという課題に取り組んだ。

この問題が、地域全体の活力低下や担い手不足を引き起こしていることを踏まえ、事業では次の3つの柱を掲げ、従来の縦割り支援の隙間を埋める新たな支援モデルを構築した。

- ①社会的課題の解決を担う若者の能力開発支援
- ②日常生活や成長に困難を抱える子どもや若者の育成支援
- ③地域の働く場づくりの支援

このモデルの特徴は、単なるスキル習得ではなく、内省と対話を重視し、地域に強固に残る暗黙知が妨げる個々の成長について地域社会全体の活性化につながるよう設計されている点にある。

事業の成果として、地域の若者が新たな働き方や起業に意欲を持つようになり、実際に地域で起業するケースも生まれた。

例えば、地域資源を活用した事業を立ち上げた若者や、地域課題の解決に向けたプロジェクトを主導する人材が増えている。また、地域の子どもたちにおいても、大人との対話やワークショップを通じて主体的な学びの姿勢が養われ、地域に対する関心が高まったことが確認された。

さらに、世代や立場を超えた対話の場が広がり、地域内での相互理解や協力関係の深化が進んだ点も、重要な成果の一つである。

地域資源の活用については、建設残土や空き家の再定義が行われ、資源循環型社会への具体的な取り組みが進んだ。

また、行政や企業との連携が強化され、行政職員の意識改革や大手企業との共創プロジェクトが実施されるなど、地域を超えた柔軟な連携体制が構築された。

本事業の特色は、スキルの習得を第一の目的とせず、まず「自己を取り戻す」こと、すなわち内省と問いの発見によって自己の本質を確認することを重視している点にある。このプロセスは、あたかも土壌の中で根を張るような成長過程に例えられる。

参加者は、自らの強みや課題を深く理解し、それを基盤に新たな価値を生み出す方法を探求する。これにより、従来の表面的なスキル獲得を超えた、本質的な自己成長が促進される。

例えば、DIY ワークショップや地域ファシリテーター養成プログラムなどの実践的な場を通じて、参加者は自らの学びを深め、地域課題の解決に向けた実践を積み重ねた。こうした内面的な成長が、結果として、地域資源の活用や新たな価値創造、外部との連携強化といった目に見える成果へとつながっている。

一方で、本事業を通じていくつかの課題も明らかになった。特に、行政とのさらなる連携の強化、外部リソースの導入、定量的な評価の強化が求められる。これまでの成果を踏まえ、育成された人材が継続的に地域課題に関わり続けるための環境整備が不可欠である。

今後の取り組みとしては、改修施設の運営マニュアル整備や成功事例の体系化、定期的な自己評価会議の開催、ファシリテーター養成プログラムの継続的实施が必要となる。また、行政・企業・教育機関との合同会議やオンラインプラットフォームの活用による情報共有を強化し、地域内外の連携を深めることが求められる。

加えて、助成金終了後も持続可能な事業運営を実現するため、業務受託、自主事業、行政補助金、企業スポンサー、クラウドファンディングなど、多角的な資金調達の方法を検討することが重要である。

本事業の成功をさらに発展させるためには、改修施設の運用ノウハウを体系化し、他地域へ展開する情報発信基盤を確立することが不可欠である。また、内省と問いの発見を重視したプロセスを維持しながら、価値創造と課題解決の実践事例を広く共有し、他地域や他分野の取り組みとも連携を図ることが求められる。

さらに、行政・企業・地域住民・教育機関との定例会議や合同ワークショップを実施し、都市と地方の価値交換を促進することで、人的リソースの提供と地域全体の活性化を進めることが重要となる。こうした取り組みにより、地域循環再生経済の実現に向けた新たな展開が期待される。

総じて、本事業は、経済的にも地理的にも厳しい地域において、内省と対話を通じた「みみず」的人材の育成と地域資源の再活用により、持続可能な地域活性化モデルを構築することに成功した。

しかし、定量データの可視化、行政との連携強化、外部リソースの導入、ICT 活用の強化など、今後の改善が必要な課題も明らかとなった。

伴走支援体制は非常に効果的であったが、さらなる連携の深化と評価指標の充実により、持続可能な地域循環再生経済の実現に向けた基盤をさらに強固にしていく必要がある。今後は、これらの課題に対応しながら、事業の成果を発展させ、持続的な地域活性化の実現に向けた次のステップを踏み出していきたい。

2. 基本情報

(1) 実行団体名

いいコネ W 活性化協議会(構成団体:株式会社みみずや、株式会社あやとり)

(2) 実行団体事業名

地域循環再生経済を支える『みみず』的人材の育成事業

(3) 資金分配団体名

公益財団法人長野県みらい基金

(4) 資金分配団体事業名

誰もが活躍できる信州「働き」学び「暮らし」づくり事業
(2021 年度通常枠〈第1回〉実行団体・イノベーション企画支援事業)

(5) 実施期間

2022 年 10 月～2025 年 3 月

(6) 事業対象地域

長野県飯綱町と周辺

3. 事業総括

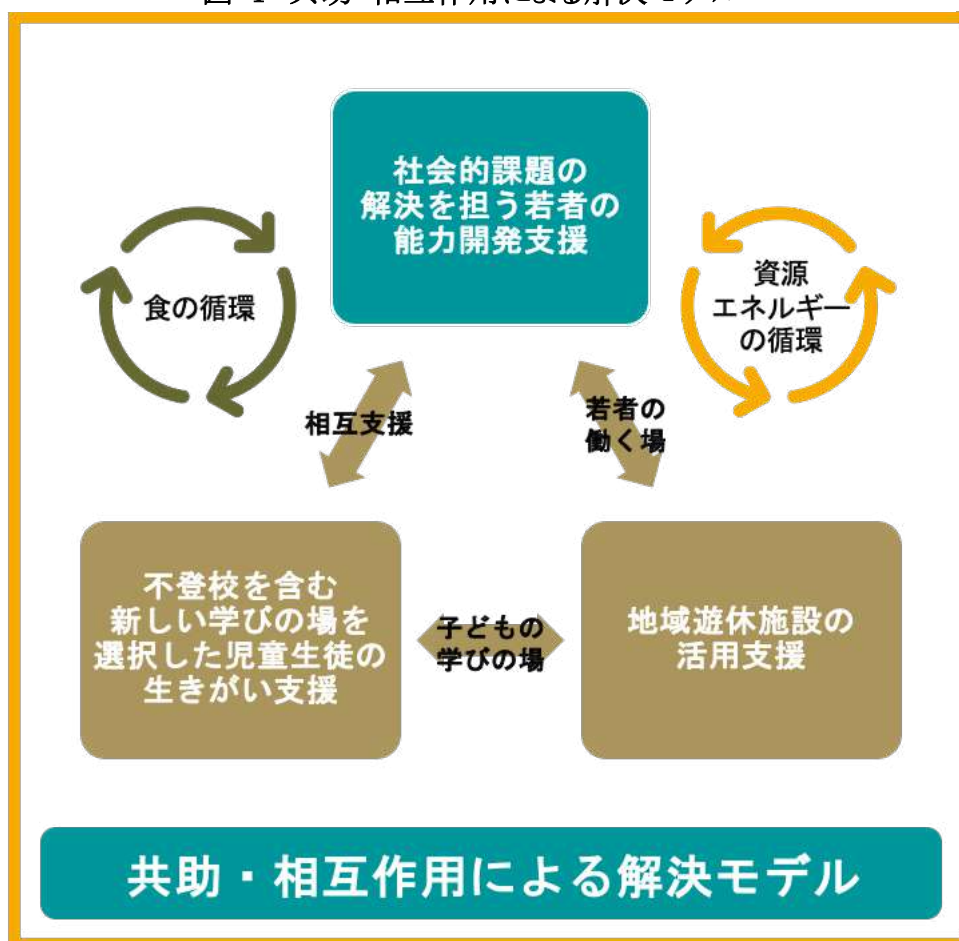
(1) 解決すべき課題

本事業が取り組んだ最大の課題は、狭く閉塞的なコミュニティに根ざす伝統的な価値観や同調圧力、時代にそぐわない慣習が、子どもや若者に生きにくさや暮らしにくさをもたらす点にある。これにより、地域における生活者や担い手が減少し、活力が失われる負の連鎖が生じている。

こうした現状は、地域全体の寛容性の低さに起因しており、問題解決に向けた包括的なアプローチが求められている。

そこで本事業では、①社会的課題の解決を担う若者の能力開発支援、②日常生活や成長に困難を抱える子どもと若者の育成支援、③地域の働く場づくりの支援という3つの優先課題に着目し、複数の分野を横断する連携を通じて、従来の縦割り支援の隙間を埋める解決モデル(図1)を構築した。

図 1 共助・相互作用による解決モデル



(2) 期待される変化、事業の目的

期待される変化は、まず子どもや若者が自己の内省を通じて自らの本質に気づき、これまでの生きにくさや暮らしにくさを克服することにある。

同時に、これからの社会や地域に求められる柔軟かつ創造的な人材と、現状とのギャップが縮小されること、さらに未活用の地域資源に新たな価値が見出されることで、地域全体の経済循環と活力が回復することが期待される。

実行団体であるみみずやは、「誰もが素直に生き、豊かさを紡いでいける地域社会」の実現を目指し、世代や専門性を超えて地域課題に取り組む『みみず』的人材を育成することで、地域循環再生経済(Re-Economy)の創出に寄与することを目的としている。図 2、3 に示すロジックモデルに基づき、内省と対話を起点とした実践的なアプローチにより、持続可能な成長サイクルの構築を目指す。

図 2 2022 年 12 月 設定 ロジックモデル

ロジックモデル

団体目的
ビジョン

誰もが素直に生き、豊かさを紡いでいける地域社会

中長期
アウトカム

信州飯綱町発、世代と専門分野を超えて地域課題を解決し
地域循環再生経済 (Re-Economy) を創る『みみず』的人材が各地で活躍する

短期
アウトカム

子どもや若者を中心とした地域の次世代を担う人材が、活動（仕事・楽しみ）を自らの力で創出し、Uターンする人が増え
共に自然や人との関わりの中で地域の文化を更新していく

アウトプット



事業体制



期待する変化

自己や地域を見つめ、他人と比較せず自己探究ができ、肯定的に考え、創造的に活動できる人材が増加

社会課題



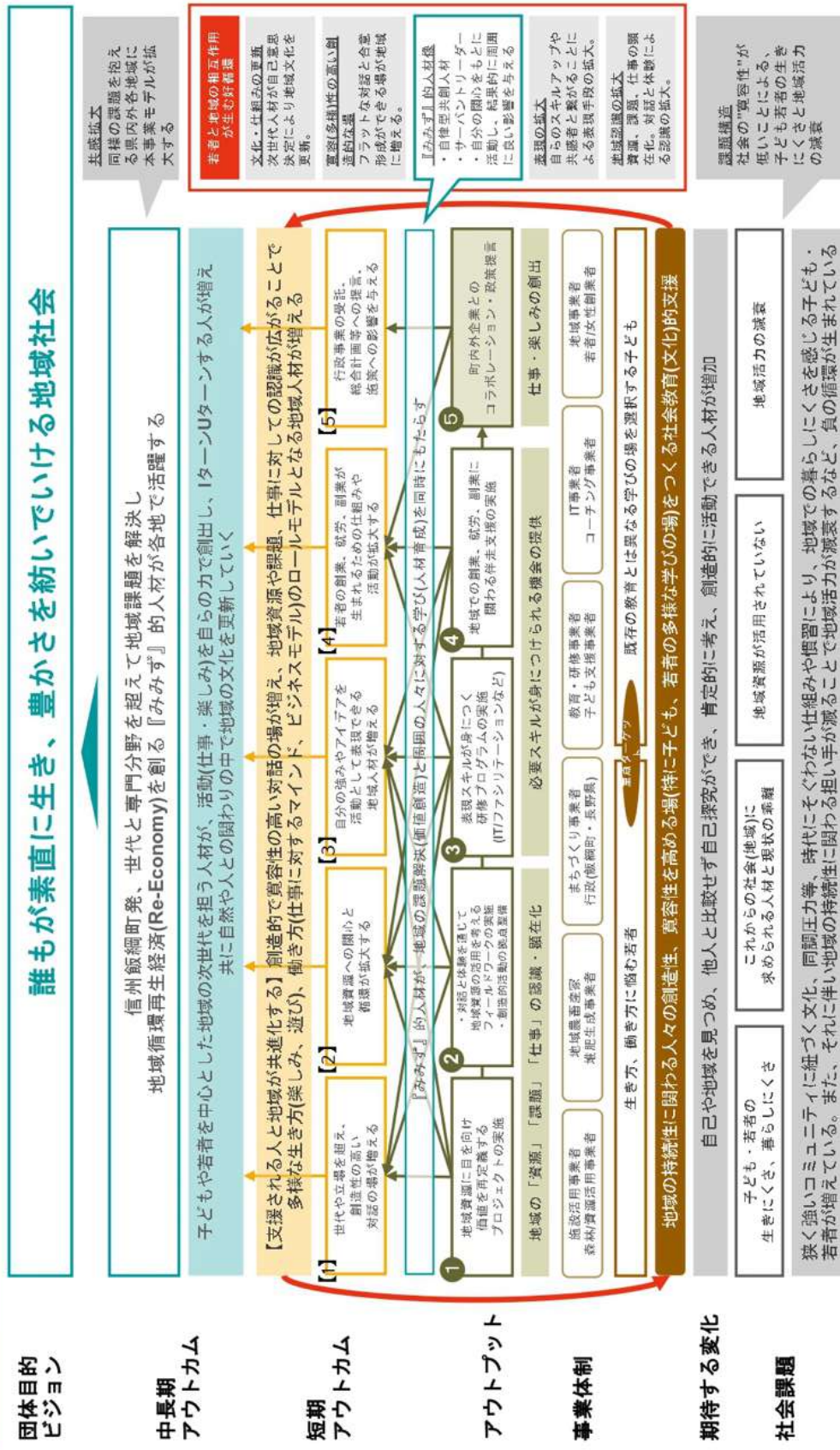
非営利型株式会社みみず
や

Copyright© MIMIZUYA. All Rights Reserved. < confidential >

0

図 3 2023 年 12 月設定ロジックモデル

ロジックモデル ※2023年12月更新



(3) 課題解決に向けた具体的手法

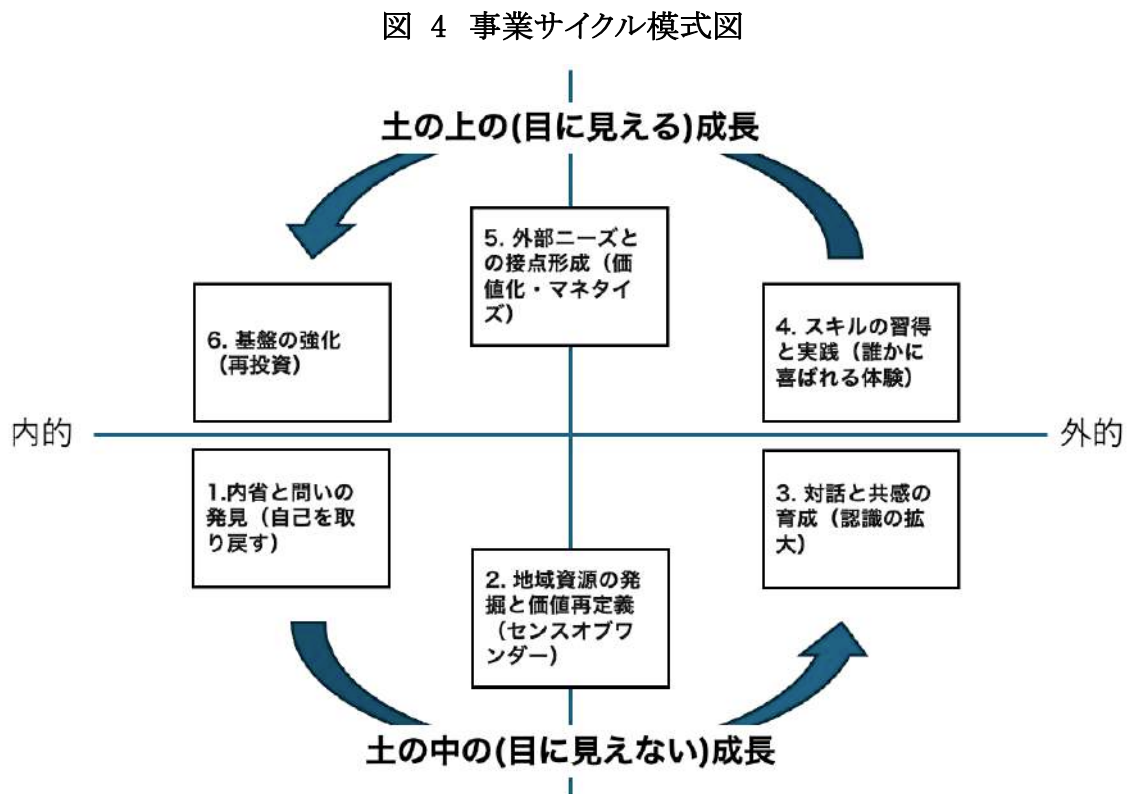
本事業の特色は、従来の単なるスキル習得型の人材育成とは一線を画し、まず参加者が内省と問いの発見により自己を取り戻すことを通じ、自らの本質に気づくところから始まる点にある。このプロセスは、あたかも豊かな土壌の中に根を張る土の中の成長のようなものであり、見た目には表に現れないが、その土台こそが後の土の上の(目に見える)成長を支える根本的な要素である。

参加者は、まず自らの内面に深く潜り、これまで気づかなかった自分自身の強みや課題を見出すことで、まるで土壌の中でしっかりと根を張り、栄養を吸収していくかのように、自己の成長基盤を固める。

この土の中の成長過程が整うと、次第に地域資源の発掘やその価値の再定義、そして対話と共感の育成といった、見えにくいながらも事業の根幹を成すプロセスが促進される。これは、土の中でじっくりと根が広がり、栄養分を十分に取り込むことで、花や実が実るための強固な根幹が形成されるプロセスに例えることができる。

こうした内面的な成長-すなわち、内省と問いの発見を通じた「土の中の成長」-が、参加者に必要なスキル習得や外部ニーズとの接点形成、さらには基盤強化という「土の上の成長」へとつながる。

図4に示す螺旋状の成長モデルは、参加者個々の内面の発展が、事業全体、ひいては地域全体の持続的活性化へと寄与する仕組みとして、実践的に機能している。



また、本事業では、アウトプットから短期アウトカムが現れる際に、『みみず』的人材が、地域の課題解決(価値創造)と同時に周囲への学び(人材育成)をもたらすという、独自の効果が発現している。

通常の人材育成がスキルの習得を第一段階としているのに対し、当事業ではまず「自己を取り戻す」-すなわち、内省と問いの発見によって自己の本質を確認する-ことが起点となる。

これにより、個々の参加者は自らの可能性を再認識し、その結果、地域資源の活用方法や新たな価値の創出につながる具体的なスキルの獲得、さらには外部との連携が図られる。誰の目にも見える「土の上の成長」は、実践的なアウトプットとして現れ、地域全体が循環再生経済へと向かう好循環を生み出す基盤となる。

実践の過程では、DIY ワークショップでの現場体験や、地域ファシリテーター養成プログラムでの対話の深化といった、具体的な事例が生み出され、それらは継続的なフィードバックとネットワーク構築の仕組みの中で、さらに強固な成長へと昇華されていく。

このように、土の中での静かな成長と、土の上で実感できる成果との相互作用によって、本事業は参加者個々の成長だけでなく、事業全体、ひいては地域全体の変革を実現する一大サイクルを確立している。

この「土の中でじっくりと根を張る」アプローチこそが、従来の即戦力を求める短絡的な育成手法とは異なり、時間をかけた内省と対話のプロセスを経ることで、真に持続可能な『みみず』的人材を育成し、地域循環再生経済の実現に寄与するための最も確かな方法であると、本事業は示している。

(4) 事業実績とアウトカムの発現

本事業は、5つの変化の主体に焦点を当て、それぞれに具体的な短期アウトカム指標を設定し、数値的・質的な成果を得ることに成功した。

まず、「生き方や働き方に悩む地域の若者」に対しては、地域資源を活用した新たな働き方や起業の意欲が高まり、実際に地域で起業する若者が出現している。

次に、「新たな学びの場を求める子ども」では、地域の大人との対話やワークショップ、学習プログラムへの参加を通じ、主体的に学びを深め、地域への関心が高まった。

「地域の創造的な対話の場」では、世代や立場を超えた対話が促進され、相互尊重の精神に基づく活発な議論の場が形成された。

さらに、「地域資源」では、建設残土や空き家の再定義と有効活用が進み、資源循環型社会の実現に向けた具体的な取り組みが実績として確認された。

加えて、「関連企業」および「行政」との連携においても、大手企業との共創プロジェクトや行政職員の意識改革が進み、従来の枠組みを超える柔軟な連携体制が構築された。

これらの実績は、各指標の達成状況や参加者の声、イベントの成果を通じて明確に示され、今後の事業の発展のための貴重なデータとなっている。

(5) 結論

本事業は、内省と問いの発見による言語化を基盤とした『みみず』的人材育成手法と、地域資源の再定義を通じた実践的な取り組みにより、飯綱町における地域活性化と循環再生経済の実現に向けた確固たるモデルを構築することに成功した。

参加者が自己の内面に気づき、地域の資源を活かした具体的な事業や対話を通じて、地域全体の活力を回復する好循環が形成された一方で、行政全体との連携や外部からのリソース導入、定量的な評価の強化といった課題も明らかとなった。

全体としては、現状の評価を踏まえながらも、持続可能な地域循環再生経済実現に向けた一歩を着実に踏み出すことができたと総括する。

(6) 今後の活動と課題

今後の活動では、まず育成された『みみず』的人材が地域課題に主体的に関わり続けるための環境整備が最優先される。

具体的には、旧土屋邸などの改修施設運用マニュアルや成功事例集を体系化し、持続可能な施設運営モデルとして定着させることが急務である。

さらに、定例の自己評価会議やフォローアップの場を設け、参加者同士が経験を深く共有できるネットワークを強化するとともに、DIY ワークショップやファシリテーター養成プログラムを定期開催し、地域全体の連携と情報共有を促進する。

また、行政、企業、地域住民、教育機関との連携強化を図るため、定期的な合同会議やワークショップ、オンラインプラットフォームの活用による情報共有の仕組みを構築する必要がある。加えて、助成金終了後も持続可能な事業運営を実現するため、業務受託、自主事業、行政補助金、企業スポンサー、クラウドファンディングといった多角的な資金調達手法の検討と実施が今後の大きな課題である。

(7) 提言

本事業で取り組んだ実践的な活動をさらに発展させるためには、まず自団体であるみみずやが、地域変革のリーダーとして、旧土屋邸など改修施設の運用ノウハウを体系化し、他地域への展開を見据えた情報発信基盤を確立することが求められる。

従来のカリキュラム習得型の人材育成を超え、内省と問いの発見を出発点としたプロセスを重視し、価値創造と課題解決の実践を通じた成果事例を広く共有する仕組みを整えることが不可欠である。

さらに、行政、企業、地域住民、教育機関との定例の連絡会議や合同ワークショップを実施し、都市と地方の価値交換を促進することで、人的リソースの提供と地域全体の連携を強化し、持続可能な地域循環再生経済の実現を目指すべきである。

こうした連携は、地域内外の知見とリソースを統合し、経済の拡大再生産を促す原動力となる。

(8) 自己評価

本事業は、飯綱町という経済的かつ地域的に恵まれているとは言えない環境下において、内省と対話を通じた『みみず』的人材の育成および地域資源の再活用によって、実践的な地域活性化モデルを構築することに成功した。

具体的には、若者の意識変革や子どもの学びの深化、世代を超えた対話の創出、地域資源の新たな価値創造、企業や行政との連携強化といった多面的な成果が現れている。

しかしながら、定量データの「見える化」や、行政全体との連携の深化、外部からのリソース導入、さらには内部の ICT 活用や情報共有の仕組みの強化といった改善点も残されている。伴走支援体制は非常に効果的であったが、今後はより具体的な連携の深化と評価指標の充実を図ることで、持続可能な地域循環再生経済の実現に向けた体制をさらに確固たるものにする必要がある。

総じて、本事業は確かな成果を挙げ、次のステップへの基盤を築くことに成功したと自己評価している。

4. 事業計画概要

本事業は、「生き方や働き方に悩む若者」および「既存の教育とは異なる学びの場を選択する子ども」を重点ターゲットとして、廃校活用施設であるいいづなコネクト WEST とその周辺環境の地域資源を活かし「新たな(多様な)学びの機会」や「創造的活動の場」を拡充することで、短期的には地域の子どもや若者の自己肯定感を高め、キャリア形成を支援するほか、中長期的には地域の“寛容性”向上に寄与することで、さまざまな地域課題の根本的な課題解決を図る取り組みである。

具体的には、地域コーディネーター/ファシリテーター/事業者の育成プログラムの開発や、拠点整備を通じたワークショッププログラムの開発などにリソースを投下し、住民の方や地域内外の企業や行政を巻き込みながら、持続可能なビジネスモデルの構築を目指すものである。

(1) 事業によって解決を目指す社会課題

地域における狭く強いコミュニティに紐づく文化、同調圧力等、時代にそぐわない仕組みや慣習により、地域での生きにくさ、暮らしにくさ、働きにくさを感じる子ども・若者が増えている。また、それに伴い地域の持続性に関わる担い手が減ることで地域活力が減衰するなど、負の連鎖が生まれている。

この現象は、飯綱町に限ったことではなく長野県、社会全体としても、子ども・若者の自己肯定感の低さ、不登校の発生率や若年層の自殺率が高いことなどからも読み取れるように、既に顕在化した大きな社会課題となっているが、根本的な課題解決に向けた取り組みは進んでいない現状がある。

具体的な事例として、本団体が活動する飯綱町周辺においては以下のような課題が特定されている。

ア 子ども・若者の生きにくさ、暮らしにくさ

- ・公立学校の画一的な教育に対する疑問や違和感を感じる子どもや保護者が増えているが、学校以外の新たな学びの場を選択することへの心理的、物理的、金銭的ハードルが高い
- ・就労や創業、親元就農、子育てなどでUターン/Iターンした若者が、地域活動や慣習(消防団、公民館、祭など)について、現代的な生活スタイルとの調和が取れないことから暮らしにくさを感じる要因となっている
- ・年功序列、男尊女卑といった現代社会にそぐわない価値観が残っており、それによって子どもや若者の創造的な発言や活動が抑制されてしまう

イ これからの社会(地域)に求められる人材と現状の乖離

- ・行政として抱える課題は山積しているにも関わらず、多くの住民が自分ごととして捉えられていないため、解決に向かうための活動や議論、対話が生まれにくい(地域インフラのあり方、医療費/介護費の財政圧迫など)
- ・社会(地域)の持続可能性に欠かせないエッセンシャルワーカー(農畜産業、森林業、医療など)に対してのリスペクトや報酬が低く、担い手が不足している
- ・地域課題の解決を担う人材に必要なスキルやマインドが具体化(言語化)されていないため、地域全体(特に次世代を担う子どもや若者)にその重要性が認識されていない

ウ 地域資源が活用されていない

- ・原油高や環境負荷の観点から近隣で調達可能な資源に目を向けるべき状況にも関わらず、依然として、食糧、エネルギー、マテリアルの外部調達依存度が高い
- ・不動産やその他資産の所有と経営(運用)の分離が進んでおらず、管理の行き届かない山林や空き家、農地が増えている
- ・そもそもそれらに対して地域の「資源」という認識がされていない(不用品として認識している)ため、活用が進んでいない

エ 地域活力の減衰

- ・ア、イ、ウで挙げた状況から、次世代を担う人材が地域の中で活躍できる場(就労、創業、副業の機会)が少ないため、地域全体として活力が減衰、耕作放棄地や空き家、産業/文化の衰退などにもつながっている
- ・本来、地域の持続可能性に寄与していたはずの地域活動(消防団、公民館、祭など)が、十分な対話(議論)をされないまま形式だけ引き継がれ、現代の多様な生活スタイルとの調和が取れないことから参画できる人が減り、地域全体として共助や共創が生まれにくい状態となっている

上記で挙げたア～エは、常に表裏一体、“ニワトリとたまご”の関係性であり、行政機関でいうさまざまな部署間の連携が必須となる非常に複雑な課題構造となっている。

つまり、本事業において「子ども・若者」の生きにくさ、暮らしにくさの解決を目指すとき、単に子どもの居場所づくりや若者のキャリア形成の支援をおこなうだけでは、到底解決にはいたらない課題構造になっていることが明らかとなった。

また、このような課題構造の整理、施策立案にあたり、そういった複雑な課題や地域風土、文化といった潜在的かつ包括的なファクターを評価する指標として「地域の寛容性」について定量評価する取り組みを参照した。

(地方創生のファクターX-寛容と幸福の地方論-,LIFULL HOME's 総研,2021/8)

こちらにおいて、長野県は「寛容性※」の総合指標が全国 39 位と下位に位置し、他の都道府県に比べ、全体主義的な同調圧力が強い地域性を持っていることが示唆されており、実際に飯綱町で確認されている上記の現象や、住人の話や感覚とも一致することが多かった。

※寛容性:「女性の生き方」「家族のあり方」「若者への信頼」「少数派の包摂」「個人主義」「変化の受容」という6つの分野を設定して、それぞれ個人を重視する自由主義的な項目を4つ、伝統的な規範や集団を重視する保守主義的な項目を4つ、全部で48項目の状況について、地域社会や自分の周囲の人たちについてあてはまる程度を4段階で尋ね、各分野の回答を得点化し都道府県によるばらつきを偏差値化し、6分野の平均偏差値で都道府県別の寛容性を順位付け

さらに、同報告において「地域の寛容性」と「出身地域へのUターン意向(東京圏在住者)」や「総合幸福度(Well-being)」との間に正の相関が確認されていることから、地域をより持続可能にしていくために「地域の寛容性」を高めていく取り組みが必要であり、その際の指針として、地域における文化芸術に触れる機会や多様な教育の場を持つことが「地域の寛容性」を高める効果を持つことも示唆されている。

以上を踏まえ、本事業を通じて地域に「新たな(多様な)学びの機会」や「創造的活動の場」を拡充することで、短期的には地域の子どもの自己肯定感を高め、キャリア形成につながる効果

を期待できるほか、中長期的には地域の寛容性を向上させることで、子どもや若者の生きやすさ、暮らしやすさにつながる効果が期待できる。

また、その効果を地域全体へ波及させていくことで、上記のア～エの課題解決に繋げることができるものと考えている。

(2) 最終受益者、直接対象グループとその人数

最終受益者	直接対象グループ
・都市部で生き方や働き方に悩む若者 ・飯綱町内で生き方や働き方に悩む若者 ・既存の教育とは異なる学びの場を選択する子ども ・上記と関わる家族と地域の人々	・都市部で生き方や働き方に悩む若者 ・飯綱町内で生き方や働き方に悩む若者 ・既存の教育とは異なる学びの場を選択する子ども
人数:4,000 人	人数:50 人(初年度)～500 人

(3) 事業の概要(中長期アウトカム、短期アウトカム、活動の概要)

ア 中長期アウトカム

- ・信州飯綱町発、世代と専門分野を超えて地域課題を解決し、地域循環再生経済(Re-Economy)を創る『みみず』的人材が各地で活躍する
- ・創造的で寛容性の高い対話の場が増え、地域資源や課題、仕事に対する認識が広がることで多様な生き方(楽しみ、遊び)、働き方(仕事に対するマインド、ビジネスモデル)のロールモデルとなる地域人材が増える。
- ・子どもや若者を中心とした地域の次世代を担う人材が、活動(仕事・楽しみ)を自らの力で創出し、IターンUターンする人が増え、共に自然や人との関わりの中で地域の文化を更新していくことで、地域循環経済が再興する。
- ・同様の課題を抱える県内外の各地域において、本事業に関わった人材が活躍したり、飯綱町での事業モデルを参考にすることで、地域の根本的な課題解決に貢献することができる。

イ 短期アウトカム

短期アウトカム	モニタリング	指標	初期値／初期状態	中間評価時の値／状態	事後評価時の値／状態
【0】 『みみず』的人材(地域コーディネーター/ファシリテーター/事業者)が増える・活動する	✓	本事業に関わることで地域コーディネーター(ファシリテーター/ナビゲーター)と名乗り活動する人数	0 名	10 名	20 名
【1】 世代や立場を超え、創造性の高い対話の場が増える	✓	本事業に関わる人材が地域内外でコーディネーター(ファシリテーター/ナビゲーター)として活動をおこなった実績	0 件	10 件	20 件
【2】 地域資源への関心と循環が拡大する	✓	プログラム参加者へのアンケートの回答数および意識の変化(消費、活動変化)	回答数 0 件	・回答数 20 件/年 ・地域資源を活用したプロダクト、サービスへの関心が拡大する	・回答数 50 件/年 ・地域資源を活用したプロダクト、サービスへの消費行動が拡大する
		地域資源を活用したワークショップ企画に協力姿勢を示す地域事業者の数	0 事業者	10 事業者	20 事業者
【3】 自分の強みやアイデアを事業として表現できる地域人材が増える	✓	プログラム参加者(特に子ども若者)へのインタビュー回答数および意識の変化	回答数 0 名	・回答数 5 名/年 ・自分の強みやアイデアの言語化ができ、創造的	・回答数 10 名/年 ・活動意思に基づいた必要ス

				活動意思が顕在化する	キルの顕在化と事業実行の際の課題感が明らかになる
		本事業に関連した人材によって企画された事業、イベント、WEB サイトなどの実績	0 件	2 件	5 件
【4】 若者の創業、就労、副業が生まれるための仕組みや活動が拡大する		人材課題についての地域企業インタビュー	0 件	5 件	10 件
	✓	本事業を通じて顕在化した地域の仕事(季節性、定期問わず)リスト登録数	0 件	30 件	60 件
		本事業を通じて地域の仕事に従事した(副業も含む)実績	0 件	5 件	10 件
【5】 行政事業の受託、総合計画等への提言、施策への影響を与える		本事業で開催するプログラム、イベントに参加した行政職員の数	0 名	のべ 50 名	のべ 100 名
	✓	行政の後援、委託などの実績	0 件	3 件	6 件
		総合計画策定における提言(事例、データ参照など含む)実績	0 件	0 件	1 件

ウ 活動の概要

・アウトプット

アウトプット (矢印は短期アウトカムとの対応)	モニタリング	指標	中間評価時の値・状態	事後評価時の値・状態
① 地域資源に目を向け価値を再定義するプロジェクトの実施 ⇒【1】【2】【3】	✓	ゴミ、処理に困る物が資源として活用された実績	5 件	10 件
		プロジェクトに参画するメンバーの数と質(メンバーリスト、SNS グループなどで可視化)	50 名(事業者、地域出身者、移住者、域外在住者、大学生、世代、男女などがバランスよく参画している)	100 名(事業者、地域出身者、移住者、域外在住者、大学生、世代、男女などがバランスよく参画している)
		新プロジェクトの立ち上がり実績	1 件	3 件
		地域課題に対するインタビュー回答数と認識の具体性(深掘り度)	5 件(初期時点では認識できていなかった地域課題が顕在化する)	10 件(課題の具体性が上がる/今まで地域課題について関心なかった人の変化が起こる)

② ・対話と体験を通じて地域資源の活用を考えるフィールドワークの実施 ・創造的活動の拠点整備 ⇒【1】【2】【3】	✓	フィールドワーク(宿泊型、日帰り型を含む)への参加人数	のべ 100 名	のべ 200 名
		古民家、農地の整備状況	創造的活動が行える 基礎的整備が整う	古民家や農地を活用した創造的活動 が生まれる
③ 表現スキルが身につく研修プログラムの実施(IT/ファシリテーションなど) ⇒【1】【2】【3】【4】	✓	研修プログラムへの参加者数	のべ 30 名	のべ 100 名
		プログラムを通じたアウトプット(HP や事業実績など)の実績	5 件	10 件
④ 地域での創業、就労、副業に関わる伴走支援の実施⇒【2】【3】【4】	✓	創業、就労、副業に関するセミナー開催数	2 件	4 件
		本事業での継続的サポートをおこなう事業者の数	1 事業者	3 事業者
⑤ 町内外企業とのコラボレーション・政策提言⇒【5】	✓	新規協力企業の数	5 社	10 社
		行政への本事業の活動レポート、評価データの提出	1 回	2 回

・活動

活動	時期
【アウトプット①に対する実施】 ・地域資源(食、材料、エネルギー)の顕在化(データ調査、インタビューの実施、記事、リストの作成など) ・地域資源の循環に関するプロジェクトの立ち上げ(WEB、SNS での発信を含む)、メンバーの募集 ・定期活動(空き家改修・遊休農地活用)の実施 ・先行事例調査と知見の共有	【1 年目】2022/10～2023/3 ・地域資源に関するデータ調査 ・プロジェクトキックオフイベントの実施(2023 年 1 月/3 月) ・プロジェクト HP、SNS の開設(2022 年 11 月～12 月) ・先行事例の調査/視察の実施(2022 年 10 月～2023 年 3 月)
	【2 年目】2023/4～2024/3 ・地域事業者等へのインタビューの実施、記事作成 ・先行事例の調査/視察の実施 ・SNS/HP でのプロジェクト活動発信 ・定期活動の実施(毎月一回程度はオープンイベント実施) ・コミュニティマネジメント(SNS グループ/案内の送付など)
	【3 年目】2024/4～2025/3 ・地域事業者等へのインタビューの実施、記事作成 ・SNS/HP でのプロジェクト活動発信 ・定期活動の実施(毎月一回程度はオープンイベント実施) ・コミュニティマネジメント(SNS グループ/案内の送付など)

【アウトプット②に対する実施】 ・『みみず』になって地域の資源をたがやそう」ワークショップの実施 空き家改修を軸としたワークショップ:解体、木こり、地域内での材料調達、壁塗り、窯づくり、DIY 工具体験会など 遊休農地活用を軸としたワークショップ:農業体験、収穫祭、新しい農法に関するセミナー(乾田水稻など) ・「地域ファシリテーター養成合宿」の開発、実施 ・創造的活動がおこなえる場所として空き家(旧土屋邸)を整備する 土間部分をアトリエ(DIY や工作、作品作りができる場所)として整備し、地域のクリエイター(プロ/アマチュア問わず)に貸し出す その他部分の活用についてはプロジェクト進行の中で方針、工程について話し合い、改修を進める 定期活動やワークショップの拠点として活用する	【1 年目】2022/10～2023/3 ・「地域の資源をたがやそう」ワークショップの実施 2 回 (2023 年 1 月/3 月) ・地域ファシリテーター養成合宿の実施 1 回(2023 年 2 月) ・古民家改修の実施 【2 年目】2023/4～2024/3 ・「地域の資源をたがやそう」ワークショップの実施 6 回 (2023 年 5 月/7 月/9 月/11 月/2024 年 1 月) ・地域ファシリテーター養成合宿の実施 2 回 (2023 年 5 月/2024 年 2 月) ・古民家改修の実施 【3 年目】2024/4～2025/3 ・「地域の資源をたがやそう」ワークショップの実施 6 回 (2024 年 5 月/7 月/9 月/11 月/2025 年 1 月) ・地域ファシリテーター養成合宿の実施 2 回 (2024 年 5 月/2025 年 2 月) ・古民家改修の実施
--	---

【アウトプット③に対する実施】 ・地域課題(資源)に関するアンケート、インタビューに基づいた必要スキルの顕在化、深掘り ・事業構築に向けた表現スキル(IT/マーケティング/ファシリテーション/プレゼンテーションなど)アップ講座の開発/実施 ・スキルアップ研修を内製化するための活動(先行プログラム視察/内部研修実施/先行事業者からのコンサルティングを受けるなど)	【1年目】2022/10～2023/3 ・先行プログラム視察/内部研修実施
	【2年目】2023/4～2024/3 ・必要スキルの顕在化、深掘り ・先行プログラム視察/内部研修実施 ・スキルアップ講座のモニター実施 4 回 (2023 年 6 月/8 月/10 月/12 月)
	【3年目】2024/4～2025/3 ・スキルアップ講座のモニター実施 6 回 (2023 年 4 月/6 月/8 月/10 月/12 月/2024 年 2 月)

【アウトプット④に対する実施】 ・③の参加者に対する継続的なサポート(関連イベントの案内、サポート窓口の設置、相談対応) ・地域課題(資源)に基づいた創業、就労、副業に関するセミナー、座談会の開発、実施 ・対話型経営伴走支援サービスの開発/実施(オンラインも活用) ・経営伴走サービスを内製化するための活動(先行プログラム視察/内部研修実施/先行事業者からのコンサルティングを受けるなど)	【1年目】2022/10～2023/3 ・先行プログラム視察/内部研修実施
	【2年目】2023/4～2024/3 ・先行プログラム視察/内部研修実施 ・③の参加者に対する継続的サポートの実施 ・就労、副業に関するセミナー、座談会の実施2回(2023年12月/2024年2月)
	【3年目】2024/4～2025/3 ・就労、副業に関するセミナー、座談会の実施2回(2024年12月/2025年2月) ・③④の参加者に対する継続的サポートの実施 ・伴走支援サービスの開発/実装
	【4年目～】2025/4～ ・就労、副業に関するセミナー、座談会の実施2回(2024年12月/2025年2月) ・伴走支援サービスの運営

【アウトプット⑤に対する実施】 ・企業への人材に関するヒアリング/営業活動(協力、協賛、共創事業)の実施 ・飯綱町総合計画への提言につながるような関係性の構築、継続的な企画立案、働きかけ ・事業実施において顕在化した地域課題(資源)とその活用方法に関する示唆をまとめた報告書の作成	【1年目】2022/10～2023/3 ・企業への人材に関するヒアリング/営業活動
	【2年目】2023/4～2024/3 ・企業への人材に関するヒアリング/営業活動 ・企業とのコラボイベント(ワークショップなど)の実施 ・次期総合計画策定における本事業を通じて得られた示唆をまとめたレポートの作成と町への提出(2023年10月)
	【3年目】2024/4～2025/3 ・企業とのコラボイベント(ワークショップなど)の実施 ・企業との共創事業(ワークショップなど)の試験実施 ・次期総合計画策定における本事業を通じて得られた示唆をまとめたレポートの作成と町への提出(2025年3月)
	【4年目～】2025/4～ ・企業との共創事業(ワークショップなど)の本格実施

(4) 事業で目指した出口・持続化戦略の概要

- 本事業にかかわる組織、人材の大半はすでにいいづなコネクト WEST に常駐しており、常態的に話し合いができる環境条件があり、自主事業領域で相互作用が生まれる関係になっている。
- 本事業を通じて整備をおこなう拠点(古民家、農地など)は、3 年間の助成終了後も地域事業者の常態的な利用(フリースクールの拠点、クリエイターのワークスペースなど)に加え、本事業を通じて開発する研修プログラムや地域内外企業との共創事業においても活用していく。
- 本事業を通じて得られた知見やビジネスリソースを、共創事業、行政の総合戦略への提言などに活かしていく。

5. 事後評価実施概要

(1) 実施概要

ア 評価の目的、活用

次年度以降の事業展開に向けた振り返り、反省、計画修正
ステークホルダー、他事業者等のための情報発信
地域創生事業人材育成プログラムの作成

イ 評価項目と測定方法

調査方法	・事業実施者による自己評価 ・活動記録の検証 ・外部評価者による、事業実施者へのインタビュー調査 ・事業実施者、外部評価者による、ステークホルダーへのインタビュー調査
調査実施期間	令和6年9月～令和7年2月
調査対象人数	・事業実施者 3名((株)みみずや、(株)あやとり) ・ステークホルダー、受益者となった219名のうち、特に『みみず』的人材として顕著に活動されている4名を事業実施者が選定しヒアリングを行った
調査結果の分析方法	活動記録の検証、調査から得られたエピソード、アウトカム、事業実施主体へのインタビューと受益者へのヒアリングについて分析し、本事業が人・地域にもたらしたイノベーションについて把握する

(2) 実施体制(内部/外部、評価担当役割、氏名、団体・役職)

内部／外部	評価担当分野	氏名	団体・役職
外部	プログラムオフィサー	轟 寛逸	長野県みらい基金
外部	自己評価ワークショップのファシリテーション・受益者へのヒアリング実施・取りまとめ	三原 彩音	飯綱町地域おこし協力隊
外部	自己評価ワークショップのファシリテーション・事業経過と到達点、評価の検証、事後評価全般の実施と報告書の作成	本山 章教	Mebuki
内部	事後評価全般の実施と報告書の作成	滝澤 宏樹	(株)みみずや
内部	事後評価全般の実施と報告書の作成	生田 明子	(株)あやとり

(3) 実施時期

2024年7月～2025年3月

6. 事業の実績

(1) インプット

ア 人材(主に活動していたメンバーの人数や役割など)

延べ 85 人(事務局 3 人＋各社でヘルプに入るもの 10 人＋外部からの専門家 10 人＋外部協力者 60 人)

イ 資機材(必要なもの)

農機具、野外活動に関わる資材、DIY ワークショップに関わる資材、撮影機材

ウ 経費

・契約当初の計画金額(2022 年 10 月時点)

事業費総額	48,216 千円
実行団体への助成額(総額)	26,905 千円
管理的経費	9,522 千円
評価関連経費	1,335 千円

・実際に投入した金額(2025 年 1 月時点)

事業費総額	42,731 千円
実行団体への助成額(総額)	28,240 千円
管理的経費	8,323 千円
評価関連経費	991 千円

エ 自己資金(2025 年 1 月時点)

契約当初の自己資金の計画金額 19,976 千円

実際に投入した自己資金の金額と種類 15,186 千円

資金調達で工夫した点 役員報酬、人件費に当たる経費分を自己資金として支出した。
事業売上の計上や借入なども行なった。

(2)活動とアウトプットの実績

ア 事業で介入を実施した受益者とその数

直接関わった人数 219 名

法人 34

個人事業 34

行政機関 7

教育機関 10

任意団体 2

イ 主な活動

活動 1: 自然との対話と地域循環に関わるフィールドワーク

2022 年 10 月～: 視察・情報収集フェーズ

i ひろしま自然学校視察(2022 年 10 月 3～5 日)

- ・飯綱町から 1 名が現地へ出向いた。
- ・自然体験プログラムの設計方法や、参加者が主体的に学ぶための工夫について視察および情報交換を行った。
- ・現地スタッフや参加者と話し合い、持続可能な地域経済と教育の両立事例を確認した。

ii 泰阜村グリーンウッド自然学校視察(2022 年 10 月 28 日)

- ・飯綱町関係者 5 名が訪問。
- ・里山留学や森林資源を活かした体験型教育プログラムを視察した。
- ・運営体制や資金スキーム、スタッフ育成などの情報を収集した。

2022 年 10 月 22～23 日: プレフィールドワーク・試行

- ・県外若者 4 名 + 町内の若者が参加。
- ・ファシリテーション基礎講座、りんごの収穫体験を通じた地域農家との対話などを実施。
- ・プログラム終了後に、参加者同士で価値を感じた点や改善点を意見交換した。

2022 年 12 月～2023 年 1 月: 合宿プログラム企画と広報

i 企画会議(2022 年 12 月 6 日、12 月 28 日)

- ・ひろしま自然学校の志賀氏らと、合宿型プログラムの目的・構成を検討。
- ・内省・対話を中心に据え、「ファシリテーション技術」と「自然を活用した自己理解」を重点に置く方針を決定。

ii 広報ページ制作

- ・<https://consortium.mimizuya.co.jp/fieldwork> を立ち上げ、SNS 等で参加者を募集した。
- ・合宿の目的や参加メリットを具体的に明示した。

2023 年 2 月 4～5 日:初回 合宿研修

- ・参加者:15 名(町内外、20 代～40 代)
- ・実施内容:
 - 1.自己理解ワーク(五感を使った自然散策、ジョハリの窓、価値観ランキング 等)
 - 2.ファシリテーション基礎演習(地域課題を題材にした模擬ディスカッション)
 - 3.SDGs 講義(志賀氏)
 - 4.振り返りレポート作成
- ・会場:いいづなコネクト WEST 周辺の自然フィールドを含む。



2023 年 5 月 20～21 日:先行事例への参加(Community Worker Training)

- ・飯綱町から 4 名が参加。
- ・合意形成手法やファシリテーションの応用編を体験。
- ・志賀氏が主催するプログラムにて、会議進行や意見集約方法を学んだ。

2023 年 7 月 20～21 日:2 回目 合宿研修

- ・参加者:16 名(リピーター+新規参加者)
- ・テーマ:「地域づくりファシリテーターとしての私の再編集(リフレーミング)」
- ・実施内容:
 - 1.リフレーミングワーク(ネガティブ体験の捉え直し)
 - 2.実践的ファシリテーション演習(地域課題を想定したロールプレイ)
 - 3.自然体験(森林や畑での散策、アイスブレイク手法の学習)
 - 4.アクションプラン共有(参加者が今後の行動方針をまとめる)
- ・会場:飯綱町東高原エリアを利用。

活動 2: 地域の埋もれたリソースを発掘し価値を再定義

A. 旧土屋邸の活用(マテリアルの循環)

i プロジェクト開始・アイデアソン(2022 年 10 月～2023 年 1 月)

2022 年 10 月

- ・みみずやが入居するいいづなコネクト WEST 近傍にある空き家「旧土屋邸」の母屋と離れをみみずやが借り受け、ツチクラ住建と連携して改修構想をスタート。
- ・敷地内の状況調査を実施(老朽化箇所、上下水道の確認、杉の木の有無など)。

2023 年 1 月 15 日

- ・「旧土屋邸」活用アイデアソンを開催(参加者 22 名)。
- ・地域住民・有識者が食品加工所や地域交流スペースとしての活用案を出し合った。



ii 基礎整備・DIY ワークショップ(2022 年 10 月～2023 年 8 月)

- ・杉の木の伐採(2023 年 4 月～5 月)
- ・敷地裏手にある杉を、ツチクラ住建を中心に里野林業チームと、地域住民が伐採。
- ・「寺子屋 TANQ」の子どもたちも体験参加し、斧やチェーンソーで木を倒すワークショップを行った。
- ・解体作業・基礎整備(2023 年 4 月～8 月)
- ・老朽化したキッチン・ユニットバス等を撤去。TANQ の子どもたちも体験参加。
- ・下水道連結工事、土地整地などをツチクラ住建が実施。
- ・草刈りや不要木の伐採も週 1～2 回で行われ、地元ボランティアが参加。

iii ウッドデッキ DIY(2023 年夏～9 月)

- ・製材(2023 年 5 月～6 月)
- ・伐採した杉材を信濃町の伊藤商店で製材・乾燥。
- ・ウッドデッキ施工(2023 年 8 月～9 月)
- ・地域住民や TANQ の子どもたちと DIY 形式でやすりがけ・塗装・床張りを行う。

2023 年 9 月下旬までにウッドデッキがほぼ完成。

iv 離れ改修工事(共同加工所設置)(2024 年 6 月～9 月)

- ・設計:コプレイスアーキテツ 小松氏。
- ・食品衛生基準を満たす設備を導入し、地域農産物の加工や食品ロス削減を目的としたスペースに改修。
- ・廃園となっている旧赤塩保育園の給食室から厨房機器を回収・再利用。

▽ みみずや共同加工所 お披露目会(2024 年 10 月 7 日)

- ・約 40 名参加。
- ・見学ツアー(改修のふり返し説明、設備説明)や個別相談を実施。
- ・今後の運営ルール、利用規約の発表に向けて準備中。



B. 建設残土の利活用(マテリアルの循環)

課題認識と相談開始(2022 年 10 月)

- ・ベーステックが地域貢献策として、基礎工事で発生する粘土質残土の有効活用を検討。
- ・みみずやを通じて、飯綱町在住の陶芸家・富高氏(元地域おこし協力隊)と連携する計画が浮上。

粘土層発見と子どもたちの現場見学(2023 年 5 月)

- ・ベーステックの工事現場で粘土質残土が発見されたと連絡。
- ・TANQ の子どもたちと一緒に掘削現場を見学し、粘土を一部採取。
- ・子どもたちは現場で粘土に触り、地域資源に関する簡単な学習を行った。

陶芸作品の試作・MVP 賞品採用(2023 年 10 月)

- ・富高氏が粘土を用いて陶芸作品を制作(割れや不良のないプロトタイプが完成)。
- ・「NAO's FARM CUP」(元サッカー日本代表 石川直宏氏共催)で MVP 賞品として採用され、一部作品が注目を集める。
- ・ベーステックと富高氏は、今後も適した粘土が見つかるたびに連絡し合う体制を維持。



C. 空き家・公共建物活用促進(マテリアルの循環)

i 富山県射水市の空き家・公的施設活用視察(2024 年 1 月 25～26 日)

- ・飯綱町から 11 名(役場職員、町議会議員、地域ボランティア、協力隊など)が参加。
- ・グリーンノートレーベル、水辺のまち新湊、シェアライフ富山、SCOP TOYAMA、いるかホテルを見学。
- ・空き家リノベ、創業支援住宅、民家ホテルなどの運営形態や DIY 手法を学ぶ。

ii 旧赤塩保育園 建物活用提案(2023 年以降)

- ・廃園となった保育園の給食室を解体し、旧土屋邸などで再利用する計画が発案。
- ・施設自体の利活用(食農体験拠点等)の案が検討中。

iii(仮称)みみずやインキュベーションセンター(2023 年～)

- ・廃校施設等を改修し、創業・副業支援の拠点とする構想。
- ・工事前に DIY ワークショップを実施し、壁の新設・棚の解体を地域住民が担当。
- ・新設壁の骨材等に、「旧土屋邸」整備ワークショップにて伐採した杉材を使用。
- ・一部はコプレイスアーキテクト(小松氏)とツチクラ住建が施工。



D. 地域経済循環促進(お金の循環)

i 地域通貨・経済循環に関する勉強会(2024年2月～3月)

- ・2024年2月13日:「地域循環を生むコミュニティ通貨と法制度」勉強会を実施。
- ・2024年3月19日:「飯綱版コミュニティ通貨デザインシミュレーション」にて参加者が通貨有効期限・流通範囲等を議論。

ii ニセコ町視察(2024年3月6～9日)

- ・飯綱町から6名が参加。
- ・eumoの協力を得て、地域通貨「e旅納税」や「eumo」事例を学ぶ。
- ・ふるさと納税と地域通貨を組み合わせる仕組みを視察。

iii いいづなロゲイニング 2024に向けた実証計画(2024年4月)

- ・地域通貨システムを期間限定で導入し、参加者に通貨を体験してもらった。
- ・有効期限付き通貨などのアイデアが出され、商工会や行政DX推進室との連携を模索。



E. 有機給食(食の循環)

i 松川町視察(2023年6月)

- ・飯綱町から5名が参加し、有機給食と廃校活用事例を視察。
- ・地元農家が学校給食に有機農産物を直接納入するモデルや、廃校を木工加工所として再活用する取り組みを学ぶ。

ii 高森町視察(2024年9月)

- ・長野県高森町の「CavLuck」(チョウザメ養殖、キャビア生産)を見学。
- ・農業残渣や食品残渣を、みみずコンポストで堆肥化し、みみずをチョウザメの飼料にする試みを検討。
- ・高森町長や関係者との意見交換の中で、みみずコンポストや有機給食の連携可能性が挙がる。

活動 3:IT／ファシリテーションなどのスキルアップ研修

A. 地域ファシリテーター養成講座(実践編)

i 実践編① 新プロジェクト説明会／ChatGPT 初級活用術(2024 年 3 月 27 日)

- ・目的、概要

新プロジェクト(地域プレゼンテーター挑戦プログラム)について説明。

ChatGPT など AI ツールの初級活用術をレクチャーし、参加者がプレゼン資料やチラシ作成に役立てる基礎知識を学ぶ。

- ・参加人数 8 名(町内外含む)。

- ・客観的事実

講師はあやとり 山口氏。

会場はいいづなコネクト WEST-204。

参加者は主に 20～40 代が中心で、副業・創業検討者も含まれる。

ii 実践編② 遅霜対策セミナー(2024 年 4 月 15 日)

- ・目的、概要

地域農家が直面する霜害への化学的・技術的対策を共有。

ファシリテーター養成講座参加者が、ディスカッション進行や情報共有の場づくりを実地体験。

- ・参加人数 12 名(主に農家・農業関係者)。

- ・客観的事実

講師はみみずや 中條翔太。

開催場所はいいづなコネクト WEST「とちのき給食室」。

フリーディスカッションを組み込み、霜害に関する具体的な事例が出された。

iii 2024 年 8 月 5 日:実践編③ アートとカードゲームで深める SDGs

- ・目的、概要

対話型鑑賞とカードゲーム「2030SDGs」「SDGs de 地方創生」を用い、SDGs を体験的に学ぶワークショップ。

ファシリテーターが少人数での議論を誘導し、SDGs への理解と対話手法を実践する。

- ・参加人数 3 名(集客が伸びず少人数開催となる)。

- ・客観的事実

講師はゆるくまなべ代表 藤澤重徳氏。

会場はいいづなコネクト WEST203。

ワークショップ後、主催側で集客面の課題を分析・共有。

iv 実践編④ パパ学ぼう！ママが喜ぶ肩こり解消術(2024 年 9 月 26 日・28 日)

- ・目的、概要

地域の整体師が提案する「肩こり解消術」をテーマとした体験型セミナー。
ファシリテーター受講者がチラシ作成や発表サポートなどを伴走。

- ・参加人数 5 名(男性参加者を中心に告知)。

- ・客観的事実

講師はヒューマンステーション安 飯田安彦氏。

会場はいいづなコネクト WEST203。

Canva 等を使ったチラシ制作支援をみみずや事務局が実施。



B. ペライチ講座・HP 作成・ChatGPT 活用などの IT 研修

i ペライチ&マーケティング基礎セミナー(2023 年 5 月 2 日)

- ・目的、概要

小規模事業者・個人が簡単にホームページを作成できるサービス「ペライチ」の使い方を学ぶ。

農産物やイベント告知のためのマーケティング基礎を共有。

- ・参加人数 10 名(うち 1 名オンライン参加)。

- ・客観的事実

開催場所はみみずや事務所。

質疑応答では、SNS 連携やネットショップ化に関する質問が多く出た。

ii ChatGPT 活用術

初級編が地域ファシリテーター養成講座 実践編①(2024 年 3 月 27 日)で行われた。

参加者は実際にプロンプトを入力し、資料作成や発信用テキストの例を体験。

あやとりが講師を担当し、導入費用や活用の注意点も説明。

C. 地域クリエイター養成プログラム

i 0 期生プログラム「魅力を伝える撮影技術」(2023 年 7 月 20～21 日、28 日、8 月 4～5 日)

- ・目的、概要

動画・写真・文章など、クリエイティブスキルを身につけ、地域の魅力発信や課題解決に活かす。

0 期生 2 名のモニターを対象に、プロカメラマン(岸本純氏)が指導。

- ・客観的事実

複数回に分けて実施:

Step1(7 月 20～21 日):内省・あり方の整理

(地域ファシリテーター養成合宿と合同開催)。

Step2(7 月 28 日オンライン):撮影の企画とシナリオづくり。

Step3(8 月 4～5 日):実地撮影と編集レクチャー(飯綱町のイベントを題材に撮影実習)。

受講者は撮影・編集を学んだ後、SNS やウェブで地域情報を発信する実践を行った。



D. 総合的事実メモ(活動 3 に関連するその他事例)

- ・イベント企画支援

いいづなロックの日(プロ講師による PA 講座～実践+バンドフェス企画)などで、学んだ IT スキルやプレゼン技術を実践に活用。

- ・個別キャリア相談

農家や整体師などが「ペライチで HP を作りたい」「ChatGPT でチラシ文案を作りたい」といった個別相談を行い、活動 3 で培ったスキルが伴走支援に直結。

活動 4: 地域での創業や副業に関わる対話型伴走支援

A. 一般社団法人わけしょの設立と「問い会」実施

i 一般社団法人わけしょ 設立 (2022～2023 年頃)

- ・目的、概要

地域出身の 20 代中心メンバーが集まり、若者による地域づくりを目指して創業。

飯綱町内外の若者が、地域課題を当事者意識で考える場を増やすことをミッションとする。

- ・客観的事実

代表や主要メンバーは町内外の 20 代 3 名。

事業計画には「問い会」を軸としたコミュニティ形成、若者の副業・創業支援が含まれる。

ii 問い会 (2023 年～継続実施)

- ・目的、概要

若者同士の対話イベント。「働くって何?」「地域にどう関わる?」などをテーマに、就労・起業・副業に対する想いやリアルな声を共有する。

- ・開催頻度・形態

月 1 回程度のペースで不定期開催(場所はいいづなコネクト WEST や旧土屋邸など)。

- ・客観的事実

各回の参加人数は概ね 10～20 名程度(回によって差あり)。

町内若者に加え、町外からの参加も多い。

わけしょメンバーがファシリテーションを担当し、対話型ワークを実施している。



B. 創業・副業プレゼン支援と個別伴走

i プレゼンテーション挑戦プログラム(2024 年 3 月 27 日～)

- ・目的、概要

活動 3(地域ファシリテーター養成講座・実践編)と連動し、プレゼン初挑戦者への企画立案～集客・広報～当日発表を伴走支援。

- ・客観的事実

わけしょメンバーやみみずや事務局が壁打ち・資料作成支援を行う。

対象は役場職員、協力隊、個人事業主など様々。

ii 個別伴走相談(2023 年～随時)

- ・具体例

1. 整体師「ヒューマンステーション安」による“肩こり解消術”セミナーの企画相談(2024 年 9 月開催)。

2. 地域おこし協力隊が空き家対策施策をプレゼンする際の資料作成相談。

3. 農家が自作野菜を加工・販売したい場合の販路拡大相談。

- ・客観的事実

相談窓口はみみずやが受け付け。

実際の集客やチラシ制作、当日の進行などを伴走し、副業や創業活動を支援。

C. 大企業連携における地域ホスト役

i JR 東日本 WaaS 共創コンソーシアム(2024 年 9 月 13 日実証実験)

- ・目的、概要

農業・健康経営・モビリティを絡めた実証実験を、飯綱町内で行う。

わけしょやみみずやが地域事業者との調整を担い、ホスト役を務める。

- ・客観的事実

JR 東日本、アシックス、ヤンマー、長野県などが参画。

みみずや、わけしょが地域コーディネートを担当し、WaaS 側と農業者・宿泊施設等をマッチング。

ii アシックスとのアグリスポーツワーケーション定例打ち合わせ(2023 年～)

- ・目的、概要

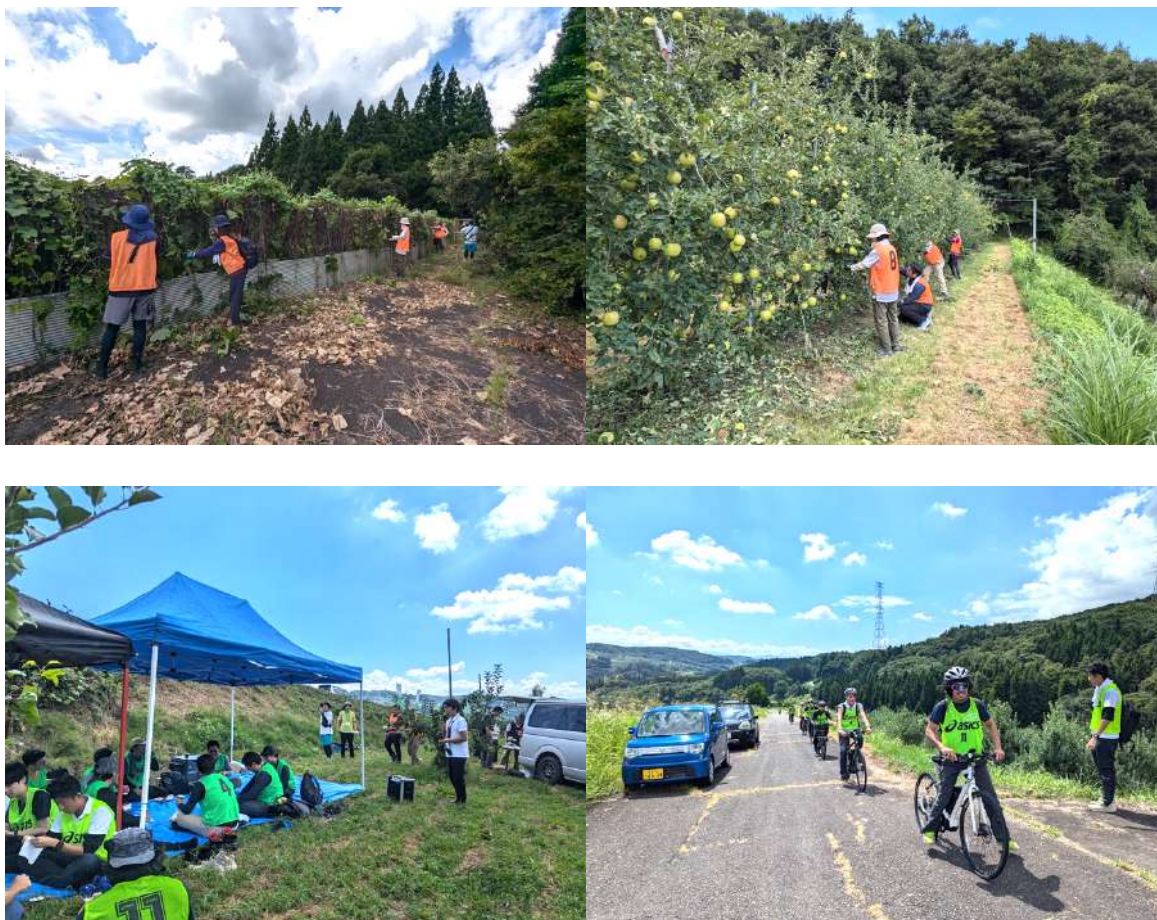
飯綱町でスポーツと農業体験を組み合わせたワーケーションを企画。

創業・副業支援の一環として、わけしょメンバーが都市部企業の社員と町内事業者を繋ぐ。

- ・客観的事実

毎月～隔月程度でアシックスとオンライン・対面ミーティングを実施。

農家や宿泊施設の受け入れ準備状況などを確認し、プログラム化を進める。



D. その他関連事例

i 地域クリエイターとの連動

- 一部個人が地域クリエイター養成プログラム(活動 3)を受講後、デザインや SNS 広報のスキルを活かし、イベントの告知素材を制作。

ii DIY リノベーションへの副業参入

- わけしょメンバーや新規移住者が、ツチクラ住建の DIY ワークショップに参加し、副業的に改修作業を手伝う動きがある(時期:2023 年春～)。

活動 5: 事業成果の普及・拡大

A. コンソーシアム運営・広報活動

i 2022 年～: HP・SNS アカウ​​ントの運用開始

- ・目的、概要
「いいコネ W 活性化協議会」公式サイトや SNS アカウ​​ント(Facebook・Instagram 等)で、活動レポートやイベント予定を発信。
- ・客観的事実
定期的に更新し、DIY ワークショップやファシリテーター講座、セミナー実施報告などを掲載。
イベントごとに写真付きの記事をアップロードし、外部からの問合せ増加につながっている。

ii 2023 年～継続: 季刊 MIMIZU の発行

- ・目的、概要
事業の進捗や新プロジェクト紹介、参加者インタビューなどをまとめた紙媒体/電子版の広報誌を定期発行。
- ・客観的事実
Vol.1 を 2024 年 1 月 1 日、Vol.2 を 2024 年 4 月 1 日、Vol.3 を 2024 年 8 月 1 日、Vol.4 を 2025 年 2 月に発刊。
「いいづなコネクト WEST」や飯綱町役場、商工会などで配布し、広報誌を通じて地域住民への周知を図る。

iii イベントレポート・活動報告のオンライン掲載

- ・実施時期
各イベント後にレポート作成(2023 年以降)。
- ・客観的事実
DIY ワークショップ、ファシリテーター合宿、問い会などでの様子を写真つきで公開。
報告内容: 日付・場所・参加人数・成果・次回予告など。

B. 視察対応・他地域連携

i 北陸まちづくり団体視察(2024 年 1 月 25～26 日)

- ・目的、概要
富山県射水市・富山市の空き家や公共施設活用事例を学ぶため、飯綱町から 11 名が現地を訪問。
同時に本事業の活動内容を相手側に紹介し、連携の可能性を探る。
- ・客観的事実
視察先: グリーンノートレーベル、水辺のまち新湊、SCOP TOYAMA、いるかホテル等。
視察後、報告レポートをコンソーシアム HP で公開し、他自治体からの問合せが増えた。

ii 企業連携による視察・意見交換(2023～2024 年)

- ・主な企業
三菱重工機械システム、JR 東日本、アシックスなど。
- ・客観的事実
事業成果を紹介するために、飯綱町内の DIY 現場や共同加工所を案内。
打ち合わせを通じて、健康経営やワーケーション、農業体験を組み合わせたプログラム検討が進んだ。

C. 最終評価・報告に向けた打ち合わせ・ヒアリング

i 中間評価合同ワークショップ(2024 年 8 月 31 日、9 月 22 日 ほか)

・目的、概要

関係団体(みみずや、あやとり、Mebuki、地域おこし協力隊、長野県みらい基金など)が集まり、進捗を共有しながら中間的な評価ポイントを整理。

・客観的事実

2024 年 8 月 31 日に第 1 回ワークショップを開催。

2024 年 9 月 22 日に追加のワークショップを実施。

事業関係者 15 名程度が出席し、ヒアリング項目を確定。

ii 最終評価に関する打ち合わせ(2024 年秋～冬)

・実施内容

評価計画策定、ヒアリング対象者リストアップ(旧土屋邸設計士、りんご農家 K 氏、TANQ 保護者、大工 A 氏など)。

聞き取り項目(参画動機、成果、課題など)を作成。

・客観的事実

本山氏(Mebuki)に評価関連の調整を依頼。

2024 年 11 月頃から個別ヒアリングを開始し、年度内に取りまとめを進める計画。

D. その他の普及・拡大の具体的事例

i 登壇・広報活動(2023～2024 年)

・事例

長野県環境政策課「くらしふと信州イベント」で事業概要を発表(日時:2023 年 6 月 XX 日など)。

シビックイノベーション拠点(スナバ)へのプレゼンやワークショップ(塩尻市スナバとの連携イベント)を実施。

・客観的事実

飯綱町の事例紹介に対して「DIY リノベ+ファシリテーター育成」という組み合わせが他自治体から注目を集めている。

ii 連携先への定期連絡・情報共有(随時)

対象: 商工会、商店会、町内企業、他 NPO 等。

・客観的事実

定期メールやニュースレターを発行し、共同加工所の利用案内や地域通貨実証計画などの最新情報を伝達。

ウ アウトプット、外部との連携の実績

アウトプットとして計画した内容ごとに指標、中間評価時の目標、最終評価時の目標、実績、実績内訳としてそれぞれ記載する。

①アウトプット a.地域資源に目を向け価値を再定義するプロジェクトの実施		
②指標 ・ゴミ、処理に困る物が資源として活用された実績	③中間評価時の目標 5 件	④最終評価時の目標 10 件
⑤実績 全 10 項目、計 15 件		
⑥実績内訳 1.空き家(旧土屋邸)を食農体験に関わる創造的拠点として改修し活用(5 件) 2.町内の空き家にあった什器等を、旧土屋邸やみみずや事務所で活用 3.空き家(旧土屋邸)裏に生えた杉の木を伐採し、ウッドデッキ材や事務所の内壁材として活用 4.建設残土における粘土分を、地域資源を生かした陶芸作品として活用 5.遊休農地やスキー場にはえる茅を刈り、屋根材として活用するための準備を実施 6.旧三水第二小学校で使われていた什器を、旧土屋邸やみみずや事務所で活用 7.旧赤塩保育園の什器(調理設備・調理器具等)を磨き、旧土屋邸の共同加工所で活用 8.旧ペンションの什器(調理器具等)を磨き、旧土屋邸の共同加工所で活用 9.ホクト等のきのこの廃培地を堆肥化し、農地で活用 10.きのこの廃培地をみみず養殖の基材として活用し、チョウザメの餌としてみみずを活用する基盤形成		

①アウトプット a.地域資源に目を向け価値を再定義するプロジェクトの実施		
②指標 ・プロジェクトに参画するメンバーの数と質(メンバーリスト、SNS グループなどで可視化)	③中間評価時の目標 ・50 名(事業者、地域出身者、移住者、地域外在住者、大学生、世代、男女などがバランスよく参画している)	④最終評価時の目標 ・100 名(事業者、地域出身者、移住者、地域外在住者、大学生、世代、男女などがバランスよく参画している)
⑤実績 219 名		
⑥実績内訳 (3)外部との連携の実績(51～63 ページ)参照		

①アウトプット a.地域資源に目を向け価値を再定義するプロジェクトの実施		
②指標 ・新プロジェクトの立ち上がり実績	③中間評価時の目標 1 件	④最終評価時の目標 3 件
⑤実績 8 件		
⑥実績内訳 1.建設残土活用プロジェクト:粘土成分の多い残土を陶芸作品として活用 2.飯綱町まちづくり補助金を活用した PA 講座および PA 部の設立:音響(PA)に関する講座を開き、地域の音響技術者育成やイベント支援を目指す 3.わけしよ:地域の若者が実践的に地域事業へ取り組む枠組みを提供 4.遊休農地やスキー場の茅活用:茅を屋根材などとして利用するための活用方法を検討・実施 5.旧赤塩保育園を活用した若者向けコミュニティ住宅の提案(政策提言):建物のリノベーションや複合活用による地域の住環境・コミュニティ活性化を検討 6.農地でのオフグリッドトイレ(ラップポン):電気や水道のインフラに依存しないトイレシステムを導入・試験運用 7.フリースクール支援(TANQ と連携):不登校や学習支援を必要とする子どもたちに対する学習・交流機会を創出 8.地域ファシリテーター・クリエイター養成プログラム:地域課題の解決やイベント運営に取り組める人材を育成するプログラムを実施		

①アウトプット a.地域資源に目を向け価値を再定義するプロジェクトの実施		
②指標 ・地域課題に対するインタビュー回答数と認識の具体性(深掘り度)	③中間評価時の目標 ・5 件(初期時点では認識できていなかった地域課題が顕在化する)	④最終評価時の目標 ・10 件(課題の具体性が上がる/今まで地域課題に対して関心がなかった人の変化が起こる)
⑤実績 23 件(ヒアリング、インタビューを実施した(予定を含む)人数)		
⑥実績内訳 ・個人事業主 14 名 ・法人の社員 3 名 ・個人 2 名 ・役場職員 2 名 ・飯綱町内小学校教員 2 名		

①アウトプット b. ・対話と体験を通じて地域資源の活用を考えるフィールドワークの実施 ・創造的活動の拠点整備		
②指標 ・フィールドワーク(宿泊型、日帰り型を含む)への参加人数	③中間評価時の目標 延べ 100 名	④最終評価時の目標 延べ 200 名
⑤実績 延べ 285 名以上(宿泊研修 50 名・日帰り 185 名・定期活動 50 名)		
⑥実績内訳 ・宿泊型 地域ファシリテーター養成合宿 30 名 視察研修(広島、富山、ニセコ等) 20 名 ・日帰り型 地域ファシリテーター養成プログラム 80 名 地域クリエイター養成プログラム 5 名 旧土屋邸活用アイデアソン、給食ワークショップ 35 名 古民家解体、杉の木伐採ワークショップ 25 名 共同加工所お披露目会 40 名 ・定期活動 共同加工所 DIY 25 名 みみずインキュベーションセンターDIY 25 名		

①アウトプット b. ・対話と体験を通じて地域資源の活用を考えるフィールドワークの実施 ・創造的活動の拠点整備		
②指標 ・古民家、農地の整備状況	③中間評価時の目標 ・創造的活動が行える基礎的整備が整う	④最終評価時の目標 ・古民家や農地を活用した創造的活動が生まれる
⑤実績 古民家や農地を活用した創造的な活動を行うための基盤整備が完了		
⑥実績内訳 旧土屋邸の母屋については、歴史的情緒や味わいを残した活用を心掛け、浴室とキッチンの撤去、天井の一部解体し清掃をしたのみで、敢えて手を加えすぎないようにした。その結果、建築当時の面影を色濃く残す空間が生まれ、地域の方からの親しみを残しつつ、解体や清掃の過程そのものを楽しむコンテンツの開発にも繋がった。また、襖を取り払った昔ながらの大広間は、歴史的な雰囲気を活かしたワークショップやイベントなど、多様な用途に利用できるスペースとして活用されている。 旧土屋邸のはなれ部分は、農産物の加工や食品生産が可能な共同加工所として改修され、創造的な活動の拠点となるよう整備された。 また、下水道工事や解体、木の伐採、造成などを通じて、古民家とその周辺環境を利用しやすい状態に改修した。 さらに、DIYによる伐採や草刈りなどの整備が進められたことで、農地や体験施設として活用できる状態を整えた。これにより、古民家や農地を活用した創造的な活動の基盤が整備され、実際の活用に向けた準備が完了した。		

①アウトプット c.表現スキルが身に付く研修プログラムの実施(IT/ファシリテーションなど)		
②指標 ・研修プログラムへの参加者数	③中間評価時の目標 延べ 30 名	④最終評価時の目標 延べ 100 名
⑤実績 延べ 115 名		
⑥実績内訳 ・宿泊型 地域ファシリテーター養成合宿 30 名 視察研修(広島、富山、ニセコ等) 20 名 ・単発型 地域ファシリテーター養成プログラム 20 名 地域クリエイター養成プログラム 5 名 HP(ペライチ)講座 15 名 古民家解体、杉の木伐採ワークショップ 25 名		

①アウトプット c.表現スキルが身に付く研修プログラムの実施(IT/ファシリテーションなど)		
②指標 プログラムを通じたアウトプット(HP や事業など)の実績	③中間評価時の目標 5 件	④最終評価時の目標 10 件
⑤実績 62 件		
⑥実績内訳 ・HP での実績報告回数 21 回(情報更新回数 100 回以上) ・SNS 発信回数 37 回 ・季刊 MIMIZU の発行 4 回(発行部数 2,000 部)		

①アウトプット d.地域での創業、就労、副業に関わる伴奏支援の実施		
②指標 創業、就労、副業に関するセミナー 開催数	③中間評価時の目標 2 件	④最終評価時の目標 4 件
⑤実績 7 件		
⑥実績内訳 ・地域クリエイター養成プログラム(1 件) ・WEB サイト作成講座(1 件) ・地域ファシリテーター養成プログラム実践編(5 件)		

①アウトプット d.地域での創業、就労、副業に関わる伴奏支援の実施		
②指標 本事業での継続的サポートをおこ なう事業者の数	③中間評価時の目標 1 事業者	④最終評価時の目標 3 事業者
⑤実績 6 事業者		
⑥実績内訳 ・法人 わけしょ siiz コプレイスアーキテツ ・個人 マツキ王国 アップルファームコバヤシ TANQ		

①アウトプット e.町内外企業とのコラボレーション・政策提言		
②指標 新規協力企業の数	③中間評価時の目標 5 社	④最終評価時の目標 10 社
⑤実績 13 社(個人事業主は除く)		
⑥実績内訳 直・石川直宏 siiz カンマッセいいづな コプレイスアーキテクト ツチクラ住建 TOPPAN デジタル サフィックス わけしよ 長野国際カントリークラブ 長野信用金庫飯綱支店 飯綱町商工会 飯綱町振興公社 かわなみ観光 親交設計 日本セーフティ グリーンウッド自然体験教育センター 伊藤商店 ccobi シビックイノベーション拠点スナバ 長野ユニオン自動車 長峰会計事務所 CavLuck HOKTO ベーステック 長野市振興公社 里野林業 グリーンノートレーベル 田中あゆみ総合法務事務所 シェアライフ富山		

①アウトプット e.町内外企業とのコラボレーション・政策提言		
②指標 行政への本事業の活動レポート、 評価データの提出	③中間評価時の目標 1 回	④最終評価時の目標 2 回
⑤実績 2 回		
⑥実績内訳 中間評価時、及び最終評価時		

(3) 外部との連携の実績

本事業に連携いただいた外部機関等についてア 教育機関、イ 行政、ウ 法人、エ 個人、個人事業主、任意団体に分類して以下に列举する。(順不同)

ア 教育機関

名称	説明	所在地
三水小学校の教員	町の事業受託において、デジタル教育や有機栽培実習などで連携。子どもたちの学びを深める場づくりに貢献。	町内
牟礼小学校の教員	町の事業受託において、デジタル教育や有機栽培実習などで連携。三水小学校同様、子どもへの学習機会拡大を支援。	町内
成蹊大学・お芋掘りサークル	NAO's FARM との縁から、飯綱の農家と連携した活動を模索中。学生活動を通じて農業体験や地域交流を検討している。	県外
金沢工業大学・宮下研究室	建築を学ぶ学生が数年前から飯綱でフィールドワークを実施。活動を継続するためのプランを本事業とともに模索中。	県外
清泉女子大学・山本研究室	研究テーマとしてコンポストを取り上げたい学生が、飯綱でのフィールドワークを実施。みみずや滝澤と山本先生のつながりから企画が始まった。	県外
東京大学農学部・高橋研究室	長野市開発公社経由で紹介され、農学部学生が飯綱町でフィールドワークを実施。農業分野での共同研究や地域連携を検討。	県外
東京都立大学学生・E 氏	ミミズ研究の国内トップランナー。2023 年の「ミミズ研究談話会」で本事業関係者と出会い、今後の研究連携や情報交換を進めている。	県外
寺子屋 TANQ	県の認証を受けたフリースクール。主宰の市川氏と連携し、2023 年度には週 1 回飯綱町での活動を実施。子どもたちの学習や居場所づくりに深く関わる。	県内
信州大学	川内先生はじめシンシアプログラムの学生と連携し、意見交換を実施。大学発の地域課題解決アイデアを飯綱町で試みる可能性を探っている。	県内
長野県立大学学生・O 氏	ファシリテーター養成プログラムの一環で飯綱町にて映画上映会と対話会を主催。大学での学びと地域を繋ぐ実践例となっている。	県内

イ 行政

名称	説明	所在地
飯綱町役場	町の行政機関として、本事業全体と連携。各事業局面において多角的に情報交換を行い、町の取り組みと事業を結びつける役割を果たす。	町内
小布施町	櫻井前町長らが農業やゼロウェイストなどで連携を模索。みみずやの視察も行われ、飯綱町との共同プロジェクトの可能性を探る段階にある。	県内
松川町	有機農業推進を行う自治体同士として視察や高校生のフィールドワークを実施。飯綱町の若者との交流が進んでいる。	県内
長野県環境政策課	くらしふと信州オープン DAY で講演やみみずふれあいワークショップを実施。300 名以上が来場し、環境政策と地域活動を結びつける場を提供。	県内
高森町	CavLuck のつながりをきっかけに、まちづくりへのみみず活用を検討。2025 年度以降に施策への落とし込みを検討中。	県内
長野県	WaaS 共創コンソーシアムで県として関与し、広域自治体の立場から新たな地域モデルの創出を目指す。	県内
飯山市	WaaS 共創コンソーシアムに参加。周辺自治体同士の連携で若者支援や空き家活用などを共同実施する可能性を探っている。	県内
伊那市	新しい米作方法(バイオスティミュラント資材をつかった乾田節水栽培)の普及促進ならびにゼンショーホールディングスと住友商事東北の米のサプライチェーン確立のセミナーを共催。	県内
佐久穂町	新しい米作方法(バイオスティミュラント資材をつかった乾田節水栽培)の普及促進ならびにゼンショーホールディングスと住友商事東北の米のサプライチェーン確立のセミナーを共催。	県内

ウ 法人

法人正式名称	一言解説	所在地
株式会社みみずや	本事業の幹事団体として、DIY やファシリテーター合宿、フリースクール連携などを統括。町内に拠点を置き、各種プロジェクトの調整役を担う。	町内
株式会社あやとり長野支社	構成団体として、町内での実践や対話型ワークショップを主導。ファシリテーションや運営ノウハウを提供し、若者が地域と関わる仕組みを作る。	町内
株式会社アシックス	神戸市のオープンイノベーション事業経由でマッチング。アグリスポーツワーケーションを飯綱町で実証するなど、新規協力企業として地域交流やスポーツを掛け合わせた活動を推進。	県外
株式会社ジェイアール東日本企画	WaaS 共創コンソーシアムにて、みみずやとアシックスらと連携し、大企業を巻き込んだ地域共創型プロジェクトを企画。外部企業のプロモーション力を活かす新規連携。	県外
株式会社直	元サッカー日本代表で FC 東京コミュニティジェネレーター石川直宏氏個人事務所。NAO's FARM 農場長として飯綱町に定期的に通い、本事業メンバーとも連携しながらスポーツと農業を掛け合わせた活動を展開。	県外
司法書士行政書士あゆみ総合法務事務所	みみずや立ち上げ時から法務面でサポート。本事業を通じた創業支援にも関与。	県外
株式会社あやとり浜松本社	構成団体として浜松市を拠点に持ち、IT 活用や広域連携の知見を持ち込む。	県外
株式会社 SDW ホールディングス	株式会社あやとりの株主。本事業推進に理解ある株主。三重県でも地方創生事業への支援をしている。	県外
長峰税務会計事務所・長峰社会保険労務士事務所	みみずやの税務・社労業務全般をサポート。本事業を通じて創業・副業を始める人へのサポートを実施。	県内
公益財団法人長野県みらい基金	休眠預金の資金分配団体。本事業の財源を提供し、事業全体を後押しする。	県内

株式会社 siiz	空き家活用担当の地域おこし協力隊経験者。2024 年法人化し、本事業を通じて伴走支援を受ける。ファシリテーター養成や土屋邸の改装などで実践的連携を行っている。	町内
株式会社コプレイスアーキテクツ	飯綱町出身の一級建築士。土屋邸アイデアソンを契機に、本事業で設計監理を担当。DIY とプロ施工の融合を図り、地域のプレイヤーを巻き込む仕組みをともに創出。	町内
株式会社ツチクラ住建	飯綱町の工務店で旧土屋邸の所有者。改装業務や本事業の推進に多大な貢献。西村氏が主担当として DIY との連携をサポート。	町内
一般社団法人わけしょ	本事業をきっかけに創業した、飯綱町出身の 20 代 2 名 + みみずや滝澤が中心の社団法人。若者同士の「問い会」やロゲイニングなどを企画し、20 代が地域に関わる場を創出。	町内
株式会社 eumo	コミュニティ通貨プラットフォーム事業者。地域循環経済の勉強会で講師や企画支援を担当。新たな金融モデルを用いた町内通貨実験の可能性を探索。	県外
特定非営利活動法人ひろしま自然学校	地域ファシリテーター養成プログラムの企画・講師を担当。合意形成手法の実践や理論を提供し、本事業の軸となるファシリテーション文化を根付かせた。	県外
有限会社伊藤商店	旧土屋邸裏の杉木を製材する信濃町の製材業者。DIY や木材活用で協力し、子どもたちの体験の場を提供。	県内
株式会社 Ccobi	代表の K 氏がいつづなコネクト WEST で登記。新法人立ち上げに際し、本事業のネットワークを活かして支援を受ける。	県内
株式会社長野ユニオン自動車	TANQ 保護者であり、社用車リースや車検、整備を担当。	県内
株式会社 CavLuck	高森町でチョウザメ養殖を行う事業者。まちづくりやエコフィードとしてのみみず利用などを検討し、将来的なコラボレーションを模索中。	県内
ホクト株式会社	長野県を代表するきのこメーカー。イベント協賛などで連携し、2025 年以降は保養所管理業務をみみずやに依頼する計画が進行中。	県内

株式会社ベーステック	代表の K 氏とみみずや滝澤が学生時代からの縁。建設残土粘土を陶工とコラボする企画を実施。町内の産業廃棄物を新たな価値へ転換する可能性を探る。	県内
一般社団法人長野市開発公社	U スタジアムや動物園、温泉施設などを運営。みみずコンポストなど地域循環の講演を若手社員研修で実施。	県内
株式会社里野林業	旧土屋邸裏の杉木を伐採。TANQ の子どもたちにも安全体験の場を提供し、地域資源の利活用をサポート。	県内
株式会社カンマッセいいづな	いいづなコネクトの運営会社。日常的な情報交換、連携。テナントであるみみずやの活動にも関わる。	町内
TOPPAN デジタル株式会社	いいづなコネクト EAST に拠点を置き、みみずやとのデジタル教育推進事業で連携。地域の IT 化にも貢献。	町内
長野国際カントリークラブ (日成観光株式会社)	町内のゴルフ場で代表の古木氏が地域活動に積極的。イベント共催や宿泊の利用など、柔軟に本事業を支援している。	町内
長野信用金庫	地域に唯一支店を構えるの金融機関として、みみずやへの融資を含めてサポート。新たに創業・副業を始める人へも金融相談を行う。	町内
飯綱町商工会	町の商工会であり、本事業のメンバーも所属。事業者同士の交流やイベント協力などをコーディネート。	町内
有限会社飯綱町ふるさと振興公社	農業や直売所・飲食店を運営する町の公社。農業連携や情報交換など日常的に行い、本事業の農業関連企画を下支え。	町内
株式会社かわなみ観光	ニセコ視察の際に宿泊先として利用。洞爺湖町周辺の観光事業者として、地域通貨やワークショップへのアイデア交換などを行う。	県外
株式会社親交設計	地域通貨のデザインやマネジメントに興味を持つ社長の市村氏が、勉強会を機に通貨デザインに関わる。県外から定期的に飯綱を訪れ、事業共創を続ける。	県外
日本セイフティー株式会社	防災用トイレ「ラップポン」の販売事業者。みみずやは販売代理店として連携。飯綱町への納品も実施。	県外

グリーンノートレーベル株式会社	富山県射水市でまちづくり・建物活用をサポート。視察時に情報交換し、地域資源を生かした事業づくりの事例を学ぶ。	県外
合同会社シェアライフ富山	富山視察の際に施設アテンド。寮の改装やコミュニティづくりなどについて情報提供。	県外
特定非営利活動法人水辺のまち新湊	富山県射水市の内川地区でまちづくりに取り組む NPO。視察時に建物活用やコミュニティ再生の事例を学ぶ。	県外
東日本旅客鉄道株式会社	WaaS 共創コンソーシアムの一員。飯綱町を舞台にした実証実験で交通や観光の視点を導入する。	県外
ヤンマーホールディングス株式会社	WaaS 共創コンソーシアムの一員。飯綱町での農業関連の実証を検討し、本事業の農業ネットワークとも連携を探る。	県外
三菱重工機械システム株式会社	エネルギーや機械システム分野の知見を地域課題解決に活かす可能性を模索中。	県外
TOPPAN デジタル株式会社	WaaS 共創コンソーシアムの一員。既存の TOPPAN デジタルとは別の事業部門で参加。	県外
特定非営利活動法人グリーンウッド自然体験教育センター	泰阜村にある自然体験教育の老舗。飯綱町のメンバーが視察し、山村留学や自然体験プログラムの知見を得た。	県内
シビックイノベーション拠点スナバ	塩尻市のインキュベーション拠点。みみずコンポスト設置をきっかけにイベント登壇や情報交換を行う。	県内
株式会社サフィックス	いづなコネクト WEST に拠点を置く会社。女性・子育てママ社員が多く、みみずやとも近隣同士で協力。	町内
一般財団法人 HAL 財団	バイオスティミュラント資材活用農業を通じて知り合う。みみずやの活動に共感していただき、積雪地域の農業のありようで協力を約束し、これまでに数回打ち合わせ。特にシカによる食害の農業について協働を模索中。	県外
株式会社 NORINA	バイオスティミュラント資材活用農業を通じて知り合う。みみずやの活動に共感していただき、応援をいただいている。イベント協賛も提供いただいている。	県外

有限会社まごころ・ふれあい農園	長野市中条の有機栽培農家。無農薬・無化学肥料の野菜作り事業者として有名。地域内の循環物をうまくつかい、事業として成立する有機農業について、研修していただく。	県内
のらくら農場	佐久穂町の有機栽培農家。持続可能な有機栽培の事業者として有名。地域内の循環物をうまくつかい、事業として成立する有機農業についてご指導いただく。	県内
有限会社大塚ファーム	北海道石狩郡新篠津村にて入植110年の農薬や化学肥料に頼らない健康で美味しい有機野菜を生産。持続可能で大手を相手に有機野菜の栽培販売について教えるを乞う。	県外
バイオシード・テクノロジーズ株式会社	あやとり生田の浜松の幼馴染からバイオスティミュラント資材活用農業に明るい人として紹介され、当初はりんごの霜被害対策での新型技術の知見をいただく。みみずやの活動に共感していただき、イベント協賛も提供いただいている。なお、農水省輸出・国際局が進めるコメ輸出プロジェクトのうち、みみずやは長野県を含む中部日本の担当としてさまざまな機会をいただく。	県外
株式会社ハタケホットケ	塩尻に移住してきた若者たちが起業した農業機器開発のベンチャー企業。理念や小型什器をつくる合理的な活動はみみずやと共通するもので、今後、ミズニゴール（水田除草機）やシカニゲール（シカ食害防止機器）の開発で協力していく。	県内
中部電力株式会社	地域とのつながりで新事業構築をめざす部署。Ccobi 代表 K 氏のママ友ご縁で始まり、地域協働について検討。中部電力本社はあやとり生田のクライアントでもあったため、今後の取り組みを模索中。	県内
アサヒバイオサイクル株式会社 サステナビリティ事業本部 アグリ事業部	バイオスティミュラント資材活用農業を通じて知り合う。スーパードライの残渣物をつかったビール酵母バイオスティミュラント資材の販売と活用した農法の普及とともに協力し合う。	県外
住友商事東北株式会社 エネルギー・生活関連グループ 食料・農業事業チーム	バイオスティミュラント資材を活用した乾田節水型稲作方法の普及とそれで収穫されたコメの新しいサプライチェーンづくりをともにおこなう。	県外

株式会社ゼンショーホールディングス グループ MD 本部 米穀部 契約栽培課	バイオスティミュラント資材を活用した乾田節水型稲作方法の普及とそれで収穫されたコメの新しいサプライチェーンづくりをともにこなう。	県外
株式会社 HUUUU	長野市に本拠地を置く編集の専門会社。飯綱町に空き店舗を改装し、PAKAAN COFFEE STAND を開店。改装にあたってはみみずやも協力。地域の接点の場として機能させるために今後の協働について模索中。	県内

エ 個人、個人事業主、任意団体(個人名は一般名称として記載)

名称	解説	所在地
りんご農家	りんご農家。ロゲイニング企画をきっかけに本事業と連携。共同加工所の試験運用や DIY に参画し、農業と地域活動の橋渡し役を果たす。	町内
地域おこし協力隊・ライター	飯綱町の地域おこし協力隊で集落支援を担当。前職がライターであり、季刊 MIMIZU の取材・執筆などを行う。新規協力メンバーとして地域発信に貢献。	町内
デザイナー	建築士の小松氏経由で紹介され、季刊 MIMIZU のデザイン担当。スポーツ好きで NAO's FARM にも関わり、事業のデザイン面をサポート。	町内
子ども向け体育教室運営者	子ども向け体育教室を主宰し、屋外アクティビティも企画。フリースクールや古民家周辺整備など多方面で活躍。地域の若者や子どもと密に連携。	町内
デザイナー・美容師	本職は美容師だが、副業でデザイン業務を担当。みみずやのチラシや SNS などビジュアル面をサポート。	町内
若手農家	飯綱町出身の 20 代。大学生時代にみみずやでアルバイト。就職後に U ターンして農業を開始。研修や業務委託を受けながら、本事業とも連携し、若者のロールモデルになりつつある。	町内
事業評価者・事務代行業	元飯山市職員。TANQ 保護者の紹介で本事業の評価業務に参加し、事業コンサルタント的役割を担う。	県内
庭師・調理師	TANQ 保護者のつながりから庭師・調理師として参加。加工所作成や改装時の大工仕事でも力を発揮し、子どもたちに実技を教える場を作る。	県内
若手農家（事業承継準備中）	中野市の若手農家。行員時代からみみずやとの関わりがあり、農業とキャリアの両面でサポートを受けながら実家を継承する準備を進める。	県内
地域イベント企画任意団体	20～50 代の地域メンバーが集まり、いづなロゲイニングなどを企画する任意団体。みみずやメンバーと共同でイベントを運営し、町全体の盛り上げに貢献。	町内
地域住民 T 氏	いづなコネクト WEST や旧土屋邸の近所に住む住民。DIY やイベントなどの際に声をかけ、地域住民として協力してもらっている。	町内

地域シニア M 氏	旧土屋邸の旧所有者の親族で、近所に住むシニア。TANQ の子どもたちの活動時に食事や体験サポートを行うなど、温かい見守り役を担う。	町内
養蜂事業者	元地域おこし協力隊（任期～2024/11）。養蜂事業を個人事業として始め、事業連携や相談を継続的に受けている。新規協力形態として活発に関わっている。	町内
解体業者	ツチクラ住建経由で旧土屋邸のユニットバス解体を担当。TANQ の子どもたちが安全に関われるよう柔軟な対応をしてくださった。	町内
りんご農家（新規移住）	飯綱町のりんご農家。みみずや中條の同級生で、前にお世話になっていた農家の逝去を機に2024 年末に移住。農業を通じた地域活性や若者の働き方改革に関心を持つ。	町内
水道工事業者	加工所の水道設備工事を担当。ツチクラ住建からの紹介で、DIY と専門工事のバランスを取りつつ作業してくれた。	町内
大工業者	加工所の大工工事を担当。ツチクラ住建経由で協力。DIY との協働で、さまざまな人たちが安全に学びつつ工事が進む体制を整備。	町内
地域おこし協力隊・多文化交流	飯綱町の地域おこし協力隊（インバウンド担当）。ファシリテーター養成合宿を機に本事業関係者との交流を深め、旦那さんも含めて多文化交流の橋渡し役を果たす。	町内
陶芸家	元地域おこし協力隊で、赤塩焼き復活をミッションとする陶工。工事残土の粘土活用などでコラボ。	町内
整体師	いいつなコネクト WEST に拠点を置く整体事業者。ファシリテーター養成合宿や実践編に参加し、地域活動や行政への提案など精力的に関わる。	町内
若手カメラマン	全国で活躍する若手カメラマン。地域クリエイター養成プログラムの講師を務め、若者が撮影や映像表現を学ぶ機会を提供。	県外
音響技術者	ヤマハ所属で、いいつなロックの日の PA 講座講師として来訪。外部からの専門知識をもたらす個人事業者として協力。	県外
美唄市地域おこし協力隊	美唄市の地域おこし協力隊。北海道訪問時にみみずや滝澤と出会い、その後飯綱町に足繁く通い、2025 年の移住を予定。	県外

りんご農家・SGDs ファシリテーター	中野市のりんご農家で、SDGs カードゲーム公式ファシリテーター。地域ファシリテーター養成プログラム実践編に挑戦。	県内
茅職人	戸隠を拠点とする茅職人。土屋邸アイデアソンの参加を機に連携し、2025 年に地域おこし協力隊として活動を検討中。	県内
事業コンサルタント	事業コンサルタント。本事業の中間評価を第三者視点で担当し、ファシリテートも実施。	県内
キッチンカー事業者	みみずやのアルバイトを経て、合宿時の調理業務を担当。その後キッチンカー事業を立ち上げ、DIY には子どもも関わる形で進めるなど、多世代が協働する事例をつくる。	県内
木材活用実践者・元地域おこし協力隊	飯綱町の元地域おこし協力隊。森や木材の活用会社を立ち上げ、「遊友団」の一員として地域活動に貢献。薪割りプログラムやウッドデッキ作りなどでも協力。	町内
りんご・米農家	飯綱町の米とりんご農家。体験農業の受け入れや田んぼの貸し出しなど、みみずや関連の企画に積極的に協力。	町内
女性食文化団体	地域の食文化を守る女性団体。農業体験の調理部門や、加工所利用などで本事業と協力し、伝統的な食文化の担い手として活動。	町内
宿泊施設運営者	町内の宿泊施設で、オーナーの旦那さんがハワイでミミズ研究を行っていた経験を持つ。町外からゲストが来た際の宿泊先として協力中。	町内
飲食店経営者	町内最大規模の飲食店。リニューアル時にあやとり生田が支援を行い、以後、合宿やイベント時の弁当などを発注。	町内
宿泊施設経営者	飯綱東高原の宿泊施設。地域ファシリテーター養成合宿の会場として利用。新規連携事業者として宿泊面のサポートを担う。	町内
自然栽培農家	ニセコ町や洞爺湖町周辺で自然栽培に取り組む農家。ニセコ視察時に地域通貨の加盟店として訪問し、地域との農業連携のヒントを得る。	県外
若手飲食事業者	洞爺湖町で飲食を営む 20 代のグループ。ニセコ視察時に地域通貨の加盟店として訪問し、若者が主体的に地域を盛り上げるスタイルを共有。	県外
環境配慮型牧場	小布施町で牛、人、環境に配慮した畜産に取り組む牧場。TANQ の子どもがフィールドワークを行うなど、実践的な学習機会を提供。	県内

和菓子店経営者	善光寺周辺の和菓子店。鯉焼き屋として有名。TANQ の子どものフィールドワークを受け入れ、地域の食文化体験を支援。	県内
フリースクール協力者	SNS で本事業を知り、フリースクール活動の支援に参加。TANQ の子どもたちに石器づくり体験を提供するなど、ユニークな学習機会を演出。	県内
地域住民 Y 氏（新規移住）	あやとり生田の大学時代友人。生田の活動様子を見聞きて東京から飯綱町への移住を決断。土日だけだが、みみずやの活動やリンゴ畑での作業に参加。	県内
来訪者 S 氏	ひろしま自然学校志賀さんのお弟子さん。名古屋在住で長野県立大大学院に社会人講座で入学中。度々来飯。ファシリテーター養成合宿にも応援に入ってくれた。飯綱のりんごを名古屋で広めるエヴァンゲリスト。	県内
牧場経営者	堆肥や草刈、耕運などでみみずやに協力。火事で自宅も牧場も損壊したが、焼け残った牧舎と倉庫の前に仮住まい家を建てて、事業再構築をしている。	町内
新聞店経営者	飯綱町内の新聞店店主。栄商店街会長など地域の様々な協議会や活動の中心的存在。	町内
地域住民 U 氏	だんどりの会メンバーではあるが、それ以上に町内のご婦人が他との接点を作ってくれ、さらに加工所のモニター2号。	町内
地域住民 H 氏	協議会メンバーの住む坂口集落のあやとり生田遠戚。だんどりの会メンバーではあるが、それ以上に町内のご婦人が他との接点を作ってくれる。	町内
給食ワークショップ参加者	有機給食導入に向けたワークショップを開催。町内外から参加し、生産者や保護者、子どもたちの声を拾い上げながら仕組みづくりを模索。	町内
DIY ワークショップ参加者	旧土屋邸や共同加工所などでの DIY を体験。専門家・地元大工・子どもらが一緒になって学ぶ合うことで、楽しみながら町の拠点整備に貢献。	町内

土屋邸アイデアソン参加者	町内外から集まり、旧土屋邸の活用方法を議論。DIY や合宿プランのアイデアを出し合い、本事業の初期コンセプト形成に貢献。	町内
ファシリテーター養成合宿参加者	志賀氏（NPO 法人ひろしま自然学校）らが講師を務めた合宿に参加。対話や合意形成スキルを学びながら、町の具体的課題に取り組む。	町内

オ 連携機関との関連性

本事業に連携いただいた外部関係機関等について、関係性を図 5 のとおりエコマップとして可視化した。

ア～エの分類に応じて 4 象限にわけ、中心に近いほど本事業において深い連携があったということを表している。

・全体の傾向

全体として、右象限の民間団体・個人について関係性が強く、左象限の公的機関との連携が比較的浅く、その数も少ないことが図から読み取れる。

・民間団体等(右象限)について

3 年という短い期間において『みみず』的人材の育成を行うため、ある程度意図的に、機動力のある民間団体や個人との連携を行ってきており、その結果が現れていると言える。

関係性の深い方々を中心に新たな関係性が生まれ始めており、実際にはより多層的な広がりとなっている。

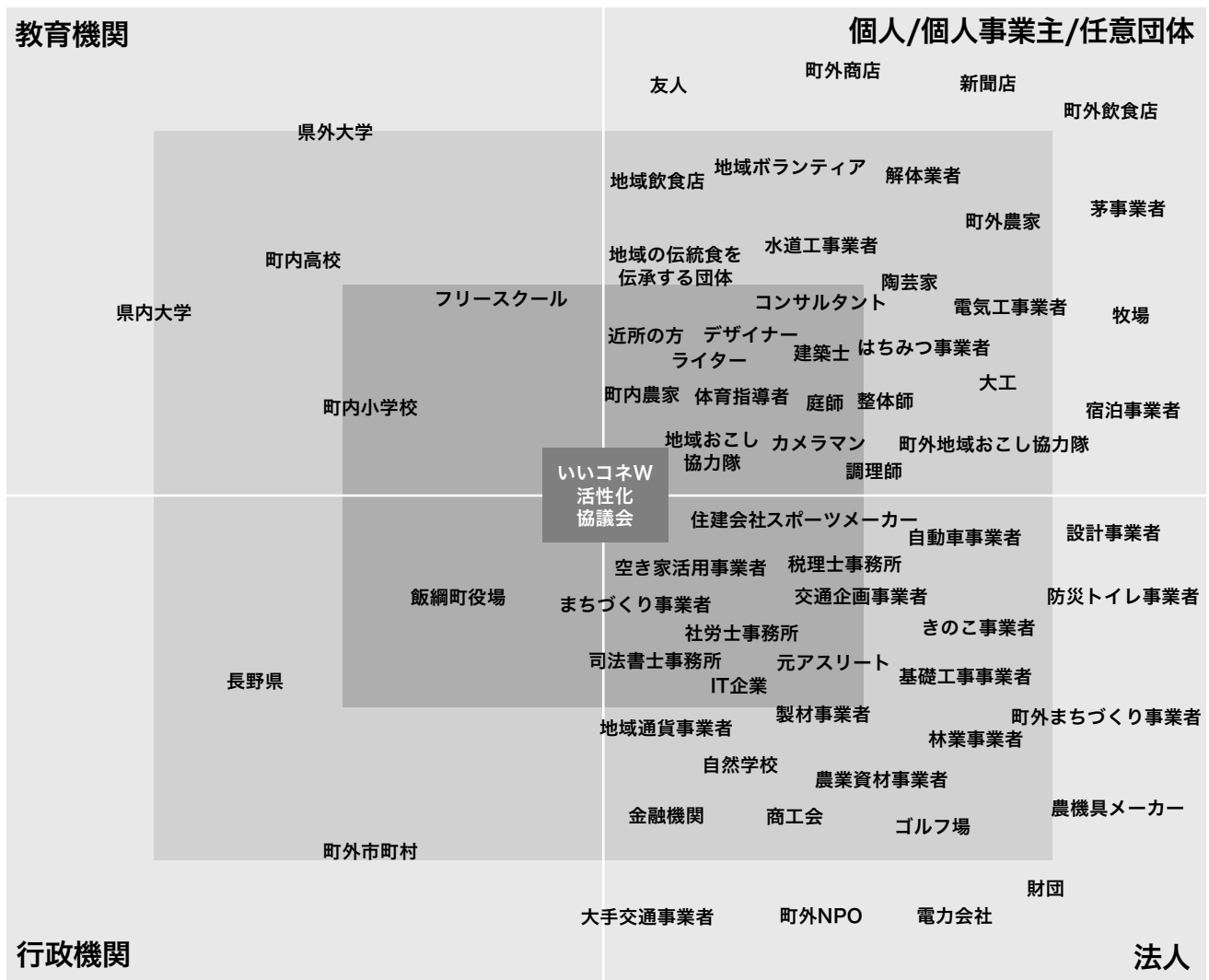
・公的機関(左象限)について

現在は関係性が比較的薄い公的機関において、教育機関においては飯綱町内の 2 小学校におけるデジタル教育や有機栽培実習を継続的に行っており、教員・職員や保護者の理解を得つつある段階にある。大学等地域活性化、農業分野、ミズ研究等で連携が始まっており、今後の連携強化に期待できる。

行政機関についても連携数は少ないが、イベントやワークショップへ参加いただいた一部職員の方をはじめとして活動に対する認知や理解が進み始めており、積極的な協力を得られる段階に進んでいる。

また、地域おこし協力隊や法人等を通じて飯綱町外の市町村との連携も始まっており、各地域における社会的イノベーションの発現に向けて関係性を深化させていきたい。

図 5 連携機関との関係性エコマップ



7. アウトカムの分析

(1) アウトカムの達成度

ア 短期アウトカムの計画と実績

本事業では以下の 5 つの「アウトカムで捉える変化の主体」に対して、計画時の短期アウトカム指標が与えた実績について記載した

- ・生き方や働き方に悩む地域の若者
- ・新たな学びの場を求める子ども
- ・地域の創造的な対話の場
- ・関連企業
- ・行政

それぞれの主体に対して、①短期アウトカム指標、②初期値、③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善点、④目標値/目標状態、⑤アウトカム発現状況(実績値)、⑥実績内訳を記載した。

ア-1 アウトカムで捉える変化の主体:生き方や働き方に悩む地域の若者

①短期アウトカム指標 【1】『みみず』的人材(地域コーディネーター/ファシリテーター/事業者)が増える・活動する本事業に関わることで地域コーディネーター(ファシリテーター/ナビゲーター)と名乗り活動する人数		
②初期値 0 件	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 参画者とのフラットで創造的な対話を通じ、自分でも認識していなかった得意や強みに気づき、自発的に事業やプロジェクトに関わる姿が見られるようになった。	④目標値/目標状態 20 名
⑤アウトカム発現状況(実績値) 14 名 (本事業への直接的、間接的関わりを通じて、地域の創造的な活動の場を支援する方)		
⑥実績内訳 ・個人事業主 11 名 ・法人の社員 3 名		
⑦考察、事例 数値上は 14 名に留まるが、構成メンバーは個人事業主、地域おこし協力隊、企業関係者、地域住民など多様な立場から集約され、互いに有機的なネットワークを形成している。 各々が独自の経験と専門性を背景に、地域課題に対する柔軟かつ創造的な対話を推進しており、従来の縦割り支援を超えた協働体制の確立に寄与している。 この多様なネットワークが、地域全体のイノベーションと好循環の原動力となる点は、本事業の真の成果であると評価される。		

①短期アウトカム指標 【2】地域資源への関心と循環が拡大する プログラム参加者へのアンケートの回答数および意識の変化(消費、活動変化)		
②初期値 0 事業者	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 参画者とのフラットで創造的な対話を通じ、自分でも認識していなかった得意や強みに気づき、自発的に事業やプロジェクトに関わる姿が見られるようになった。	④目標値/目標状態 回答数 50 件/年・地域資源を活用したプロダクト、サービスへの消費行動が拡大する
⑤アウトカム発現状況(実績値) 23 件(ヒアリング、インタビューを実施した(予定を含む)人数)		
⑥実績内訳 ・個人事業主 14 名 ・法人の社員 3 名 ・個人 2 名 ・役場職員 2 名 ・飯綱町内小学校教員 2 名		
⑦考察、事例 ・小島敬氏(個人事業主)へのヒアリングより要約(本文は 12.資料に掲載) 小島氏がみみずやと関わるようになったのは、子どもの TANQ の付き添いがきっかけ。旧土屋邸の活用議論に参加するうちに、庭師である自身の経験を活かし、整備の一部を請け負うようになると、逆に小島氏の主体的な提案が事業の効率化につながるようになった。 小島氏が過去に調理師として働いた際に感じた違和感を経て、小島氏は「創造的に仕事を進め、経済的価値を見出す」働き方を模索していたところ、本事業との関わりを通じて、自ら提案しながら納得のいく仕事の進め方を確立した。現在は庭師として、業務受託や営業活動にも主体的に取り組み、家庭と仕事の両立を図りながら、新たな働き方を実践している。		

①短期アウトカム指標 【2】地域資源への関心と循環が拡大する 地域資源を活用したワークショップ企画に協力姿勢を示す地域事業者の数		
②初期値 0 事業者	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 活動の幅を自分たちで広げるため、積極的に地域と関わり、活動交渉や材料調達をする姿が見られるようになった。	④目標値/目標状態 20 事業者
⑤アウトカム発現状況(実績値) 27 件		
⑥実績内訳 個人事業主:17 件 法人:10 件		
⑦考察、事例 本事業において、地域資源を活用したワークショップ企画への協力事業者は、当初目標値 20 件を大きく上回り、27 件に達した。 建設残土の利用では、企業の残土処理課題と陶芸用粘土需要が合致し、双方にとって有益な好事例が生まれた。また、空き家再利用では、事業者や個人が初期段階からアイデア創出に関与し、地域課題を自らの問題として捉える動きが促進された。 さらに、空き家の離れに対しては、DIY ワークショップに参加したりんご農家から具体的な利用要望が寄せられ、2025 年度より農産物の共同加工所として稼働する見込みである。 これらの事例は、地域資源への関心と循環の拡大に向けた取組みが確実に進展していることを示しており、今後もさらなる連携強化が求められる。		

①短期アウトカム指標 【3】自分の強みやアイデアを事業として表現できる地域人材が増える ・プログラム参加者(特に子ども若者)へのインタビュー回答数および意識の変化		
②初期値 回答数 0 名	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 参加者とのフラットで創造的な対話を通じ、自分でも認識していなかった得意や強みに気づき、自発的に事業やプロジェクトに関わる姿が見られるようになった。	④目標値/目標状態 回答数 10 名/年・活動意思に基づいた必要スキルの顕在化と事業実行の際の課題感が明らかになる
⑤アウトカム発現状況(実績値) 8 件(ヒアリング、インタビューを実施した(予定を含む)人数)		
⑥実績内訳 ・個人事業主 7 名 ・法人の社員 1 名		
⑦考察、事例 ・小林徹氏(個人事業主・農家)へのヒアリングより(本文は 12.資料に掲載) 小林氏は、自身が栽培するりんごの加工品を試作・製造できる施設の話聞き、すぐに「ジャムが作れるようにしてほしい」と提案した。加工業者選びの難しさを感じていたため、共同加工所の施設内容検討や DIY にも積極的にに関わり、りんご農家としての意見を反映させた。 「日本一のりんごの町」を目指す飯綱町で、通年楽しめるりんご加工品の可能性を広げるため、今後はドライフルーツやチップスにも挑戦予定。 また、小林氏は地域活動団体「The 遊友団」にも参加。地域とのつながりを持つことで、農業を進める上で必要なコネクションを得ることができた。遊友団の活動を通じ、地域との関係を築きながら、今後も事業を発展させていく考え。		

①短期アウトカム指標 【3】自分の強みやアイデアを事業として表現できる地域人材が増える 本事業に関連した人材によって企画された事業、イベント、WEB サイトなどの実績		
②初期値 0 名	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 参画者とのフラットで創造的な対話を通じ、自分でも認識していなかった得意や強みに気づき、自発的に事業やプロジェクトに関わる姿が見られるようになった。	④目標値/目標状態 5 件
⑤アウトカム発現状況(実績値) 2 件		
⑥実績内訳 ・いいづなロックの日(音楽に関する講座等を通じた人材交流、地域活性化事業) ・siiz(地域おこし協力隊による創業・空き家活用を目的に事業構築) ・わけしょ(若者による創業)		
⑦考察、事例 本事業に参加した若者たちが自らの強みや関心を基に企画・運営に関与する動きが顕著となっている。 例えば、わけしょが主導する「問い会」は、これまで地域の仕事に対して消極的だった若者が、地域の課題や将来の就職活動に繋がるヒントを見出すきっかけとなっている。 このようなイベントを通じて、参加者が自身の意見を積極的に表現することで、地域全体に新たな活力をもたらす動きが生まれている。また、ファシリテーター養成プログラム実践編では、複数の挑戦者が自ら企画から運営までの一連のプロセスを体験する機会を得、実践力を高めたことが確認されている。 さらに、プログラム参加者の複数名から 2025 年度の飯綱町まちづくり補助金獲得に向けた動きが創発しており、こうした取り組みが、単なる研修プログラムを超えて、若者が地域活性化の一翼を担う事業として成熟しつつあることを示している。全体として、当初の目標数値に近い、もしくは上回る成果が見受けられ、今後さらなる拡大が期待される状況であると評価できる。		

①短期アウトカム指標 【4】若者の創業、就労、副業が生まれるための仕組みや活動が拡大する 人材課題についての地域企業インタビュー		
②初期値 0 件	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 参画者とのフラットで創造的な対話を通じ、自分でも認識していなかった得意や強みに気づき、自発的に事業やプロジェクトに関わる姿が見られるようになった。	④目標値/目標状態 10 件
⑤アウトカム発現状況(実績値) 7 件(ヒアリング、インタビューを実施した(予定を含む)社数)		
⑥実績内訳 ・カンマッセいいづな ・コプレイスアーキテクト ・ツチクラ住建 ・TOPPAN デジタル ・サフィックス ・長野国際カントリークラブ ・飯綱町振興公社		
⑦考察、事例 ・コプレイスアーキテクト代表の小松剛之氏へのヒアリングより(本文は 12.資料中に掲載) 飯綱町出身の小松氏は、旧土屋邸の活用アイデアソンへの参加をきっかけに、地域の建築設計におけるコミュニティとの関わりの重要性を再認識した。 改修工事では、建築士として全体のディレクションをしていたが、プロの大工だけでなく施主を始め素人が DIY 工事として参加することが本事業の特徴であり、その中で意見の対立や役割分担の課題が発生した。 その渦中で小松氏は、建築家が工事全体をディレクションする役割の必要性を見出した。設計図の意図がわかる建築士本人が、業者としてではなくいちステークホルダーとして施主の要望と施工者の負担を調整することで、スムーズな進行を実現できると考えるようになった。 小松氏は、今回の経験を踏まえ、今後は地域コミュニティと積極的に関わり、建築家の役割を広げる活動を目指すと話している。 こうした取り組みは、「みみず」的地域課題の解決に貢献するものと期待される。 ・西村啓大氏へのヒアリングより(本文は 12.資料中に掲載) 西村氏は、飯綱町のさまざまな地域課題の解決に関わるキーパーソンであり、その広い人脈と行動力から「飯綱暮らし案内人」として活動している。本事業にも地域住民・業者の立場で携わり、本事業が育成を目指す地域人材(地域ファシリテーター)の最たる例となっている。 実施主体であるみみずやの立ち上げ時に株主として関わるようになり、経済的利益ではなく「地域の若者の挑戦を支援し、関わりやすくなるため」に投資を決意。飯綱町の魅力を大切にしながら、地域の活性化に貢献する姿勢が、多くの事業を支える重要な存在となっている。		

①短期アウトカム指標 【4】若者の創業、就労、副業が生まれるための仕組みや活動が拡大する 本事業を通じて顕在化した地域の仕事(季節性、定期問わず)リスト登録数		
②初期値 0 件	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 参画者とのフラットで創造的な対話を通じ、自分でも認識していなかった得意や強みに気づき、自発的に事業やプロジェクトに関わる姿が見られるようになった。	④目標値/目標状態 60 件
⑤アウトカム発現状況(実績値) 13 件(熟練度が低くてもできる業務に限定)		
⑥実績内訳 ・年間 飯綱町内子ども向け自然体験イベントのアルバイト 一棟貸し宿舎の清掃業務 施設改修における DIY 的な関わり方(ペンキ塗りなど) ・春～夏 野菜類の種まき作業 米のすじまき作業 野菜の苗植え作業 草刈り りんごの葉摘み、玉回し業務(2 件) 野菜の収穫業務 ・秋～冬 りんごの収穫 りんごの剪定 りんごの剪定枝拾い スキー場のリフト係員		
⑦考察、事例 目標値に比べ実績値は若干低いものの、熟練度が低くても可能な業務リストの拡大により、依頼者と受託者双方で創業・就労・副業への意識が芽生えている。これにより、りんごや米作農家の繁忙期の人材不足や、冬季に収入が低下する農家が副業として業務に従事する仕組みが形成され、双方のニーズが効果的にマッチしている。 さらに、各事業者との対話を通じて、事業者間で「未経験者でも貢献できる」という実感が共有され、地域全体の働き方の多様性が進展した。 今後、この取り組みが年間を通じた安定した就労機会として定着し、新たな就農者や創業者が増加すれば、地域活性化と好循環の形成に大きく寄与すると期待される。		

①短期アウトカム指標 【4】若者の創業、就労、副業が生まれるための仕組みや活動が拡大する 本事業を通じて地域の仕事に従事した(副業も含む)実績		
②初期値 0 件	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 参画者とのフラットで創造的な対話を通じ、自分でも認識していなかった得意や強みに気づき、自発的に事業やプロジェクトに関わる姿が見られるようになった。	④目標値/目標状態 10 件
⑤アウトカム発現状況(実績値) 10 件		
⑥実績内訳 ・飯綱町内子ども向け自然体験イベントのアルバイト(2 件) ・野菜の苗植え業務(1 件) ・りんごの葉摘み、玉回し業務(2 件) ・りんご、野菜の収穫業務(5 件)		
⑦考察、事例 本事業の実施を通して、地域内での仕事に従事する機会が着実に増加している。大企業との共創プロジェクトにおいては、地域コーディネーターとして若者が参画し、都市部と地方を結ぶ調整役としての仕事が生まれた事例が確認される。また、農作業や現場での作業アルバイト、さらにはイベント補助スタッフとしての短期的な副業の機会が、地域の有機的なネットワークを活用する形で展開されている。 これにより、参加者は単発の仕事に留まらず、実践的な経験を積むとともに、地域経済における就労の多様性が促進されている。 現時点で副業や短期的な就労実績は、当初設定した目標数値に達しており、事業が生み出した新たな労働の場として一定の成果を上げていると評価できる。		

ア-2 アウトカムで捉える変化の主体:新たな学びの場を求める子ども

①短期アウトカム指標 【2】地域資源への関心と循環が拡大する プログラム参加者へのアンケートの回答数および意識の変化(消費、活動変化)		
②初期値 回答数 0 件	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 自らの関心に目を向け、地域の大人と関わりながら、学びのテーマを見つけ、考えて行動できるようになった。	④目標値/目標状態 回答数 50 件/年・地域資源を活用したプロダクト、サービスへの消費行動が拡大する
⑤アウトカム発現状況(実績値) 23 件(ヒアリング、インタビューを実施した(予定を含む)人数)		
⑥実績内訳 ・個人事業主 14 名 ・法人の社員 3 名 ・個人 2 名 ・役場職員 2 名 ・飯綱町内小学校教員 2 名		
⑦考察、事例 ・旧土屋邸活用に参加した方々へのヒアリング、インタビューより 当初、旧土屋邸の母屋については、フリースクールの拠点とする予定であり、ある程度改装をする予定であったが、アイデアソンでのワークショップで意見を出し合う中で、「非日常の体験ができる場は貴重」、「子どもは、あの何もない＝なんでもできる場所があるだけで成長していく」などといった意見が出され、結果的に敢えて手を加えすぎないことで“作る”過程そのものを楽しむことのできるコンテンツの開発に繋がった。 この結果は、空き家等の地域資源活用にあたりよく聞かれる「予算がなく改装ができない」、「使う用途が思い当たらない」といった問題意識に変化をもたらし、ゴミや困りものとされている地域資源への関心と循環が拡大することに大きな役割を果たした。 実績値がまだまだ少なく、広報や周知に課題は残るが、2025 年 4 月以降、旧土屋邸の離れを改装した共同加工所について本格運用の開始を予定するなど、今後の関係者の意識変容や関係人口の増加に期待が持てる。		

①短期アウトカム指標		
【2】地域資源への関心と循環が拡大する 地域資源を活用したワークショップ企画に協力姿勢を示す地域事業者の数		
②初期値 0 事業者	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 活動の幅を自分たちで広げるため、積極的に地域と関わり、活動交 渉や材料調達をする姿が見られるようになった。	④目標値/ 目標状態 20 事業者
⑤アウトカム発現状況(実績値) 27 件		
⑥実績内訳 個人事業主:17 件 法人:10 件		
⑦考察、事例 本事業において、地域資源を活用したワークショップ企画への協力事業者は、当初目標値 20 件を大きく上回り、27 件に達した。 建設残土の利用では、企業の残土処理課題と陶芸用粘土需要が合致し、双方にとって有益な好事例が生まれた。また、空き家再利用では、事業者や個人が初期段階からアイデア創出に関与し、地域課題を自らの問題として捉える動きが促進された。 さらに、空き家の離れに対しては、DIY ワークショップに参加したりんご農家から具体的な利用要望が寄せられ、2025 年度より農産物の共同加工所として稼働する見込みである。 これらの事例は、地域資源への関心と循環の拡大に向けた取組みが確実に進展していることを示しており、今後もさらなる連携強化が求められる。		

①短期アウトカム指標 【3】自分の強みやアイデアを事業として表現できる地域人材が増える プログラム参加者(特に子ども若者)へのインタビュー回答数および意識の変化		
②初期値 回答数 0 件	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況	④目標値/目標状態 回答数 10 名/年・活動意思に基づいた必要スキルの顕在化と事業実行の際の課題感が明らかになる
⑤アウトカム発現状況(実績値) 8 件(ヒアリング、インタビューを実施した(予定を含む)人数)		
⑥実績内訳 ・個人事業主 7 名 ・法人の社員 1 名		
⑦考察、事例 ・小林徹氏(個人事業主・農家)へのヒアリングより(本文は 12.資料に掲載) 小林氏は、自身が栽培するりんごの加工品を試作・製造できる施設の話聞き、すぐに「ジャムが作れるようにしてほしい」と提案した。加工業者選びの難しさを感じていたため、共同加工所の施設内容検討や DIY にも積極的に関わり、りんご農家としての意見を反映させた。 「日本一のりんごの町」を目指す飯綱町で、通年楽しめるりんご加工品の可能性を広げるため、今後はドライフルーツやチップスにも挑戦予定。 また、小林氏は地域活動団体「The 遊友団」にも参加。地域とのつながりを持つことで、農業を進める上で必要なコネクションを得ることができた。遊友団の活動を通じ、地域との関係を築きながら、今後も事業を発展させていく考え。		

①短期アウトカム指標 【3】自分の強みやアイデアを事業として表現できる地域人材が増える 本事業に関連した人材によって企画された事業、イベント、WEB サイトなどの実績		
②初期値 0 件	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・ 改善状況	④目標値/目標状態 5 件
⑤アウトカム発現状況(実績値) 2 件		
⑥実績内訳 ・いいづなロックの日(音楽に関する講座等を通じた人材交流、地域活性化事業) ・siiz(地域おこし協力隊による創業・空き家活用を目的に事業構築) ・わけしょ(若者による創業)		
⑦考察、事例 本事業に参加した若者たちが自らの強みや関心を基に企画・運営に関与する動きが顕著となっている。 例えば、わけしょが主導する「問い会」は、これまで地域の仕事に対して消極的だった若者が、地域の課題や将来の就職活動に繋がるヒントを見出すきっかけとなっている。 このようなイベントを通じて、参加者が自身の意見を積極的に表現することで、地域全体に新たな活力をもたらす動きが生まれている。また、ファシリテーター養成プログラム実践編では、複数の挑戦者が自ら企画から運営までの一連のプロセスを体験する機会を得、実践力を高めたことが確認されている。 さらに、プログラム参加者の複数名から 2025 年度の飯綱町まちづくり補助金獲得に向けた動きが創発しており、こうした取り組みが、単なる研修プログラムを超えて、若者が地域活性化の一翼を担う事業として成熟しつつあることを示している。全体として、当初の目標数値に近い、もしくは上回る成果が見受けられ、今後さらなる拡大が期待される状況であると評価できる。		

ア-3 アウトカムで捉える変化の主体:地域の創造的な対話の場

①短期アウトカム指標 【1】世代や立場を超え、創造性の高い対話の場が増える 本事業に関わる人材が地域内外でコーディネーター(ファシリテーター/ナビゲーター)として活動をおこなった実績		
②初期値 回答数 0 件	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 相手を尊重し、創造的な対話をするための前提(規範)を研修等により共有することができたため、地域の若者や子どもたちも安心してチャレンジングな発言、行動できる場面が増えた。	④目標値/目標状態 20 件
⑤アウトカム発現状況(実績値) 14 名 (本事業への直接的、間接的関わりを通じて、地域の創造的な活動の場を支援する方)		
⑥実績内訳 ・個人事業主 11 名 ・法人の社員 3 名		
⑦考察、事例 数値上は 14 名に留まるが、構成メンバーは個人事業主、地域おこし協力隊、企業関係者、地域住民など多様な立場から集約され、互いに有機的なネットワークを形成している。 各々が独自の経験と専門性を背景に、地域課題に対する柔軟かつ創造的な対話を推進しており、従来の縦割り支援を超えた協働体制の確立に寄与している。 この多様なネットワークが、地域全体のイノベーションと好循環の原動力となる点は、本事業の真の成果であると評価される。		

ア-4 アウトカムで捉える変化の主体:地域資源

①短期アウトカム指標 【2】地域資源への関心と循環が拡大する プログラム参加者へのアンケートの回答数および意識の変化(消費、活動変化)		
②初期値 回答数 0 件	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 ゴミや不用品扱いされていた建設残土や空き家の残置物などの再資源化や価値創造に取り組む事例が生まれた。住民や外部への発信は不十分である。	④目標値/目標状態 回答数 50 件/年・地域資源を活用したプロダクト、サービスへの消費行動が拡大する
⑤アウトカム発現状況(実績値) 23 件(ヒアリング、インタビューを実施した(予定を含む)人数)		
⑥実績内訳 ・個人事業主 14 名 ・法人の社員 3 名 ・個人 2 名 ・役場職員 2 名 ・飯綱町内小学校教員 2 名		
⑦考察、事例 旧土屋邸活用に参加した方々へのヒアリング、インタビューより 当初、旧土屋邸の母屋については、フリースクールの拠点とする予定であり、ある程度改装をする予定であったが、アイデアソンでのワークショップで意見を出し合う中で、「非日常の体験ができる場は貴重」、「子どもは、あの何もない＝なんでもできる場所があるだけで成長していく」などといった意見が出され、結果的に敢えて手を加えすぎないことで“作る”過程そのものを楽しむことのできるコンテンツの開発に繋がった。 この結果は、空き家等の地域資源活用にあたりよく聞かれる「予算がなく改装ができない」、「使う用途が思い当たらない」といった問題意識に変化をもたらし、ゴミや困りものとされている地域資源への関心と循環が拡大することに大きな役割を果たした。 実績値がまだまだ少なく、広報や周知に課題は残るが、2025 年 4 月以降、旧土屋邸の離れを改装した共同加工所について本格運用の開始を予定するなど、今後の関係者の意識変容や関係人口の増加に期待が持てる。		

①短期アウトカム指標 【2】地域資源への関心と循環が拡大する 地域資源を活用したワークショップ企画に協力姿勢を示す地域事業者の数		
②初期値 0 事業	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 ゴミや不用品扱いされていた建設残土や空き家の残置物などの再資源化や価値創造に取り組む事例が生まれた。住民や外部への発信は不十分である。	④目標値/目標状態 20 事業者
⑤アウトカム発現状況(実績値) 27 件		
⑥実績内訳 個人事業主:17 件 法人:10 件		
⑦考察、事例 本事業において、地域資源を活用したワークショップ企画への協力事業者は、当初目標値 20 件を大きく上回り、27 件に達した。 建設残土では、企業の残土処理課題と陶芸用粘土需要が合致し、双方にとって有益な好事例が生まれた。また、空き家再利用では、事業者や個人が初期段階からアイデア創出に関与し、地域課題を自らの問題として捉える動きが促進された。 さらに、空き家の離れに対しては、DIY ワークショップに参加したりんご農家から具体的な利用要望が寄せられ、2025 年度より農産物の共同加工所として稼働する見込みである。 これらの事例は、地域資源への関心と循環の拡大に向けた取組みが確実に進展していることを示しており、今後もさらなる連携強化が求められる。		

ア-5 アウトカムで捉える変化の主体: 関連企業

①短期アウトカム指標 【事業計画の見直し(2023 年 10 月)の際に指標追加】関連企業の数、関与度		
②初期値 0 件	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 既存事業の行き詰まり、複雑化した社会課題への貢献などの観点から、本事業の取り組みへの関心が高まり、相談、会議レベルから始まり、小さな共創が発生している。	④目標値/目標状態 地域内外から参画や視察が中間評価時より増加し、つながりが拡大する
⑤アウトカム発現状況(実績値) 3 件		
⑥実績内訳 ・共創実績 ベーステック アシックス jeki(WaaS 共創コンソーシアム) ・視察・会議レベル JR 東日本 中部電力 ヤンマー 三菱重工機械システム TOPPAN パソナ		
⑦考察、事例 本事業における関連企業との連携は、アグリスポーツワーケーションという先進的な試みに象徴される。大手企業や産官学が一堂に会し、農作業が心身に与える影響を科学的視点で検証することで、従来の業務枠を超えた協働体制が形成された。 この取り組みにより、みみずやは通常では接点を持ちにくい企業との連携を実現し、大企業特有のイベント運営や先進的ノウハウを獲得、さらに地域の人材不足や交通手段の課題に対する実証実験を行う基盤を整えた。 都市と地域の価値交換を促進し、地域経済の循環と再生産を実現する再現性あるモデルケースとして期待される。		

ア-6 アウトカムで捉える変化の主体:行政

①短期アウトカム指標 【5】行政事業の受託、総合計画等への提言、施策への影響を与える 本事業で開催するプログラム、イベントに参加した行政職員の数		
②初期値 0 名	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・改善状況 行政担当者(飯綱町長以下、企画課、農政課、教育委員会、長野県環境政策課等)定期的な会議体生まれ、課題共有、協働や役割分担について連携を深めることができた。	④目標値/目標状態 延べ 100 名
⑤アウトカム発現状況(実績値) 延べ 34 名 (イベント参加以外で、町事業に関わる定例打ち合わせ等実施)		
⑥実績内訳 ・宿泊型 視察研修(広島、富山、ニセコ等) 2 名 ・日帰り型 地域ファシリテーター養成プログラム 2 名 旧土屋邸活用アイデアソン、給食ワークショップ 5 名 古民家解体、杉の木伐採ワークショップ 10 名 共同加工所お披露目会 5 名 ・定期活動 共同加工所 DIY 5 名 みみずインキュベーションセンターDIY 5 名		
⑦考察、事例 本事業開始当初、行政との連携は分野限定的であったが、飯綱町長以下各部署との定例打ち合わせや共同イベントを通じ、行政内での部署を超えた協働意識が着実に醸成された。 学校授業の一翼を担う取り組みや、使われなくなった行政施設の再活用提言を通じ、従来の受動的枠組みを超えた革新的な変化が現れつつある。 こうした実践により、行政職員は地域変革プロセスに積極的に関与する主体へと変化し、今後、地域全体の政策策定や各種施策への影響力がさらに高まることが期待される。		

①短期アウトカム指標 【5】 行政事業の受託、総合計画等への提言、施策への影響を与える 行政の後援、委託などの実績		
②初期値 0 件	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・ 改善状況 行政担当者(飯綱町長以下、企画課、農政課、教育委 員会、長野県環境政策課等)定期的な会議体が生ま れ、課題共有、協働や役割分担について連携を深める ことができた。	④目標値/目標状態 6 件
⑤アウトカム発現状況(実績値) 3 件		
⑥実績内訳 ・生きがい創造事業 ・有機農業推進事業 ・デジタル教育推進事業		
⑦考察、事例 本事業は、飯綱町の「生きがい創造事業」「デジタル教育事業」「有機農業推進事業」「ワー ケーション事業」など、複数の行政プロジェクトにおいて後援や委託の形で連携が進んでいる。実 際、これらのプロジェクトにおいては、事業参加者が積極的に現場に関与し、行政と連携しなが ら運営を支援するケースが見られる。 また、長野県環境政策課の主催するイベントにおいては、『みみず』的人材育成の取り組みや 環境と社会との連携について 2 度にわたり登壇する機会を得、行政内での理解と評価が深まっ た。 さらに、飯綱町からは 2025 年度以降も既存事業の継続や新たな枠組みでの事業相談が複 数寄せられており、行政との連携は今後も拡大する見通しである。 これらの実績は、行政が本事業の取り組みを地域活性化の一要素として捉え、具体的な施策 に結びつけようとする動きが進んでいることを示している。		

①短期アウトカム指標		
【5】行政事業の受託、総合計画等への提言、施策への影響を与える 総合計画策定における提言(事例、データ参照など含む)実績行政の後援、委託などの実績		
②初期値 0 件	③中間報告時点(2023 年 10 月)で把握している変化・ 改善状況 行政担当者(飯綱町長以下、企画課、農政課、教育委員会、長野県環境政策課等)定期的な会議体が生まれ、課題共有、協働や役割分担について連携を深めることができた。	④目標値/目標状態 1 件
⑤アウトカム発現状況(実績値) 1 件		
⑥実績内訳 ・旧赤塩保育園活用提言		
⑦考察、事例 本事業を通じた公益活動の実績が、飯綱町行政にも着実に波及している。 具体的には、旧赤塩保育園の活用に関する提言をはじめ、輝く農山村事業、部活動の民間移行、さらには小学校運営委員会など、地域の各種会議において本事業の知見が共有されるようになった。これにより、従来は個別の委託事業として扱われていた取り組みが、より広範な政策実行の枠組みへと昇華し、飯綱町全体の活性化に寄与する重要なプレイヤーとしての信頼感が高まっている。 また、地域おこし協力隊向けの研修講師として、連携を重視した活動の進め方や実践的なノウハウを 2 回にわたり提供することで、地域との連携強化に貢献している。 このような提言活動は、地域全体の政策形成プロセスにおいて、本事業が果たすべき役割を明確に示し、将来的な予算措置や新たな取り組みの導入に向けた基盤を固める上で、非常に有意義な成果といえる。		

イ アウトカム達成度についての評価

短期アウトカムの最終評価時目標数値には届かない内容があるものの、アウトカムでとらえる変化の主体毎にみていくと、「働き方に悩む地域の若者」「新たな学びの場を求める子供」「地域の創造的な対話の場」「地域資源」「関連企業」「行政」、以上 5 つの主体についてそれぞれに先鋭的な人材が育成されつつあり、その人材の影響力によって今後イノベーションがある程度自発的に好循環に乗って発現していくことが期待される段階まで来ている。

以下に、現在発現しつつある五つのイノベーションと、それぞれのイノベーションをもたらした活動について取りまとめ、具体的な事例について記載した。

実行団体としては今後活動を継続することで新たな『みみず』的人材を育成するとともに、本事業によって育成された『みみず』的人材によるイノベーションの好循環が地域に波及するようサポートを行う必要がある。

①発現しつつあるイノベーション 地域の資源を活用し、地域を耕すことに価値を見出して、自らの仕事にする若者の発現
②事業実施前の状況 ・地域には「仕事がない」との認識が根強く、若者が地域での働き方を具体的に想像する機会がなかった。 ・若者の仕事の選択肢が家業の継承や既存産業への従事に限定され、創造的な働き方が地域で実現しづらい状況にあった。 ・若者の多くが都市部での仕事（「出稼ぎ」）を選択し、地域の活力低下が進んでいた。
③本事業により出現したアウトカム 本事業を通じて、地域資源を活用した新しい働き方やプロジェクトに一部の若者が関わり始めたことで、地域で自ら創造して働き生活する意識が芽生えつつある。 （事 例） ・本事業を通じて開催された対話会「問い会」に参加した社会人 2 名が、みみずや主催の農業イベント（田植え体験）や飯綱町主催の子ども向け自然体験プログラムにアルバイトやボランティアとして参加し、地域の農産物や自然資源に直接触れる中で、地域の文化や自然との関わり方を深く理解し、地域で活動を継続する意欲を持つようになった。 ・地域ファシリテーター養成プログラムの成果として、同プログラムを修了した地域おこし協力隊員が、地元住民と協働で空き家の再利用、集落の活性化、インバウンド観光振興などのプロジェクトを進行している。 特に、協力隊員の一人が空き家の管理・活用を事業化し 2023 年 3 月に法人を設立した。 さらに、地域住民の間では若者の活動への理解が進み、時代にそぐわない仕組みや慣習ではなく、地域資源の活用や物々交換、人とのつながりを重視した新しいライフスタイルの認識が広がり始め、地域住民の価値観に変化が見られている。
④変化（アウトカム）をもたらした実行団体の活動 ・地域ファシリテーター養成合宿を実施し、若者の対話スキルや内省力を鍛え、地域課題を行動に移すきっかけをつくった。 ・古民家の改修をテーマとした DIY ワークショップを実施し、若者が地域資源活用プロジェクトに実践的に関与できる場を提供した。 ・若者同士が地域での働き方や生活について対話し、地域資源の可能性を議論する「問い会」の実施を支援した。 ・本事業に関する情報発信手段として「季刊 MIMIZU」を発行し、地域で活躍する具体的な人物やプロジェクトを紹介し、地域内外の認識と理解を深めた。

①発現しつつあるイノベーション この事業の支援対象になった若者が、実践的支援プログラムや伴走支援を通じて起業につながる事例の発現
②事業実施前の状況 ・地域内で起業に必要な基盤が不足しており、若者にとって起業が現実的な選択肢として認識されていなかった。 ・起業後の具体的な成功モデルや持続可能な支援環境が存在せず、起業に対する不安が高まる要因となっていた。 ・起業を促進するための専門的なノウハウや情報共有の仕組みが地域内外で整備されていなかった。
③本事業により出現したアウトカム 実践的支援プログラムの実施により、若者が新規事業を立ち上げる動きが見られるようになり、限定的ではあるが地域経済への具体的な効果が生まれている。 (事 例) ・地域おこし協力隊員として空き家活用を進めていた若者は、空き家管理・活用支援法人の設立を目指し、本事業による定款作成や事業計画の策定支援を受けて 2023 年 3 月に法人化した。 また、わけしょについて、事業計画やホームページ作成のサポートを受け 2024 年 2 月に法人化し、ロゲイニングイベントの実施や情報誌作成を通じて、地域課題の解決を目指すプロジェクトを進めている。 ・建築家の若者は、DIY 支援を中心とした、空き家を活用した宿泊施設の設計・運営事業を 2023 年 4 月に法人化した。この際には本事業で定款作成、税務運営、労務運用の支援をしている。 ・この他、個人事業や副業として 7 名(地元食材を使ったメニュー開発など)が地域資源を活用した事業を開始している。 また、事業者間での横の連携が進み、経営資源や地域資源を地域内で共有する仕組みが萌芽し、新規事業や起業に挑戦しやすい環境が形成されつつある。 (事 例) ・「いいづなコネクト WEST」や古民家「旧土屋邸」を拠点とする活動中に、事業者同士の偶発的な交流(食事中や DIY 作業中)から協働が生まれ、新商品の共同開発(乾燥野菜やジャム)が実現するなど、施設や物品の相互利用についても進展している。
④変化(アウトカム)をもたらした実行団体の活動 ・副業や創業に関する相談や伴走支援を行い、事業計画の立案や資金調達に関する具体的なサポートを提供した。 ・SNS や情報発信を通じ、地域資源や事業の可能性について共有し、地域内外の関心を高めた。 ・インキュベーションセンターを設立し起業や創業を推進すると共に、地域事業者や個人が連携して事業を進められる共同体(コンソーシアム)の構築(予定)。

①発現しつつあるイノベーション 若者たちが一般社団法人を設立し、飯綱町、住民団体等が主催するイベントや事業の運営を受注しやすくする地盤を構築
②事業実施前の状況 ・若者が地域内で主体的に活動するための基盤が整っておらず、組織的な事業展開が難しい状況だった。 ・自治体や住民団体、大手企業と地域の若者が連携する事例が限定的で、事業を受注する仕組みが未発達だった。 ・法人運営に関する成功事例が少なく、持続可能な法人運営のためのスキルやノウハウが不足していた。
③本事業により出現したアウトカム 若者が主体となって一般社団法人を設立したことで、自治体や住民団体との連携が進み、これまでに4件の事業の受注実績を積み重ねている。 1.地域住民や地縁団体と連携し、地域の価値や課題を可視化するロゲイニングイベントを「中山間地域の多面的価値の通訳プロジェクト」として企画。休眠預金を活用したソーシャルビジネス形成支援事業に採択され、事業拡大を計画中。 2.飯綱町の町づくり補助金を活用し、地域資源や店舗、人々を紹介する情報誌「zine」を制作中。2024年度末に発行予定。 3.飯綱町からの2件の委託業務を受注 ・いづな検定問題作成:ロゲイニングを通じて町の歴史や文化を住民主体で掘り下げる新たな仕組みを構築。 ・空き家関連の記事作成:町の広報誌に掲載する記事を作成し、地域住民への啓発を図っている。 さらに、大企業との地域共創プロジェクトを実証実験として受注し、地域事業者と協働して実施することで、地域内外から信頼と注目を集める新たな価値創造が発現し初めている。
④変化(アウトカム)をもたらした実行団体の活動 ・地域の若者を中心とした一般社団法人設立を支援し、法人運営に必要な手続きやスキルの習得を支援した。 ・若者が自治体や住民団体との連携を通じて事業を受注しやすい環境を構築するため、自治体に対する本事業進捗の共有や、施策への提言を行った。 ・休眠預金事業の運営を通じて得たノウハウを、地域内の他団体に提供し、会計やガバナンス体制の整備を支援した。

①発現しつつあるイノベーション 地域の資源を地域の人たちが地域で活用するための人材育成、地域食材活用及び古民家再生モデルの発現
②事業実施前の状況 ・地域資源の活用が個別的な活動に留まり、広範囲で持続可能なモデルを展開できる人材が不足していた。 ・地域食材の活用や古民家再生といった具体的なプロジェクトの実施例が少なく、地域経済への波及効果が限定的だった。 ・地域資源を持続的に活用するための知識や技術を伝える仕組みが未整備だった。
③本事業により出現したアウトカム 地域資源を活用するための対話スキルや実践型事業経験を持つ若者が育成され、空き家活用や地域食材等を活用するプロジェクトの推進に携わる人材が現れ始めている。 また、古民家の改修を通じて食品加工施設や体験スペースが整備したことで、地域食材を活用した新商品の開発が進展し、地域経済の新たな可能性が示されている。 (事 例) ・廃棄野菜の活用 規格外等の理由により廃棄予定だったとうもろこしを乾燥加工し、地元レストランや県外の小売店に供給行ったことでロスを減らした上、新たな収益源を確立 ・りんごジャムの商品化 地元農家が、これまで食用ではなかった受粉用りんご(メイポール)を加工し、小ロットのジャムとして試験販売を開始 ・加工施設の利用促進 地域の新規就農者が乾燥野菜(ドライピーマン)を加工する試験を実施中 これらの取り組みにより、挑戦を支援する枠組みや知識共有の仕組みについても形成されつつある。
④変化(アウトカム)をもたらした実行団体の活動 ・地域ファシリテーター養成プログラムを実施し、対話スキルや実践型事業の経験を提供することで、地域資源活用の担い手を育成した。 ・地域通貨デザインをテーマにした勉強会を通じて、地域経済の循環について知識と実践を深める場を提供した。 ・古民家を食品加工所や体験施設として改修整備し、地域資源を活用するための拠点とした。 ・インキュベーションセンターを設立し起業や創業を推進すると共に、地域事業者や個人が連携して事業を進められる共同体(コンソーシアム)の構築(予定)。

①発現しつつあるイノベーション フリースクール活動を通じた個別最適な学びの仕組づくりや地域人材育成の実践的プログラムの拡大
②事業実施前の状況 ・学校教育以外の多様な学びの機会や居場所に対する社会的認識や支援が不足していた。 ・地域住民や高齢者との交流や創造的な活動の場が限られていた。 ・教科学習やデジタルツールの活用が、地域や日常生活での具体的な役立ち方を実感できないまま進められていた。 ・個別最適な学びを提供する仕組みがなく、それを実現する議論も十分に活発化していなかった。 ・地域に根ざした次世代人材の育成が進んでいなかった。
③本事業により出現したアウトカム ・フリースクールをはじめとする学校外の学びの場に対する地域内での認識が広がり、学びの機会に地域の若者や高齢者が積極的に関わるようになっていく。 ・地域資源や課題に近い場所で活動することで、学びの意欲や意義が高まり、教育と価値創造が相互に連動する仕組みが生まれている。 (事 例) 1.林業者の指導のもと、小学生 5 名と地域の大人約 10 名が斧とチェンソー双方での伐採を体験。伐採材は地元のウッドデッキ建設に利用された他、年輪から樹齢を学ぶなど、この体験を通じて自然循環の大切さを実感した。 2.地域住民との協働学習 - 古民家「旧土屋邸」の改修プロジェクトにおいて、地元住民と若者が共に DIY 活動を実施。古材の再利用を学びながら、地域コミュニティとの絆を深める場となった。 ・個別最適・自由進度型の学びの場づくりをテーマに地域住民や教育機関の間で議論が活発化し、学校の授業でも地域フィールドを活用する機会が増加している。 ・これらの事象の発現により、地域に根差した次世代人材の育成が進み始めた。
④変化(アウトカム)をもたらした実行団体の活動 ・フリースクールの活動支援と、地域課題や資源を基点とした学びのコンテンツの開発。 ・各小学校や行政との連携を深めるための面談や授業支援の実施。 ・子どもたちの学びの場に、若者や高齢者が交わる多世代交流の場づくり。 ・他地域の事例視察や意見交換を通じた学びの場デザインの改善と実践。

(2) 波及効果(想定外、波及的・副次的効果)

本事業の実施を通じて生じた、想定外、波及的・副次的効果について記載する。

- ・関わる人の数が予想以上に広範囲に及んだ
当初見込んでいた参加者の枠を大きく超え、多方面からの関与が実現した。
- ・『みみず』的人材の価値観が想定以上に受け入れられ、活動がスムーズに進行した
従来の枠組みでは捉えきれなかった柔軟な人材が、プロジェクトの推進力として大いに活躍した。
- ・既存の商品・サービスの受発注を超え、答えのない新たな課題に対し、共創的活動へ積極的に参画する個人(若者)が多数参加した
予定していた業務委託費や広告費などの予算が、個人への謝金として効果的に活用され、活動の加速が見られた。
- ・地域内の事業者との有機的ネットワークが、想定よりも早く広く拡大し、大企業からの事業受託という成果が現れた
例として、JR 案件の受注に繋がるなど、地域全体での連携が強化された。

(3) 出口戦略・事業の持続化に向けた戦略の成果

本事業の根幹は『みみず』的人材の育成にあり、育成された人材が各々の専門領域で自律的に活動することにより、地域課題の解決と地域循環再生経済の創出を実現することの中長期的目標としているところ、3年目を迎えた現時点において、若者を中心に『みみず』的人材が着実に増加しており、その活動は地域内に広がりを見せている。

例えば、わけしょが中心となって開催する「問い会」は、参加した若者が地域の仕事に対する関心を持ち、実際に就職活動へとつながる動きを生み出している。さらに、ファシリテーター養成プログラム実践編においては、参加者が自ら企画から集客、運営に至る一連のプロセスを経験し、その成果が新たな事業やイベントの創出につながった。

このような取り組みは、育成された人材を頂点として裾野が広がる好循環の形成を示しており、今後さらなる発展が期待される。

また、本事業では、助成金を活用して地域資源である空き家を改修し、共同加工所として運用開始するなど、物的インフラの整備が着実に進められた。これにより、改修施設はフリースクールや各種地域事業者の活動拠点として、事業終了後も地域で実践的な活動を継続できる基盤となった。

さらに、各種育成プログラムの開発により、若者が実際に自らの得意分野や関心を生かした企画を実施する機会が拡大し、2025 年度の飯綱町まちづくり補助金獲得に向けた動きも創発している。

これらの成果は、単なる研修事業に留まらず、地域内の企業や団体が有機的に連携し、一人または一社では受注できない案件も、チームとして受注可能な体制を築くなど、地域経済に直接的な効果をもたらす結果となっている。

本事業は、構築されたノウハウ、ネットワーク、信頼関係を基盤として、助成期間終了後も自走可能な仕組みの構築に成功していると評価される。育成された『みみず』的人材が各自の活動の中で地域課題に取り組み、地域内での共創と連携を強化することにより、飯綱町全体の持続的な発展に寄与することが期待される。

(4) 事業の効率性

本事業は、飯綱町に存在する既存の廃校、古民家、遊休農地などの地域資産を有効活用することで、新たな大規模投資を伴わず、限られた予算内で多岐にわたるプログラムを同時並行で実施する高い効率性を発揮している。

これらの既存資産は、改修を経てフリースクールや各種地域事業者の活動拠点、共同加工所として運用され、事業終了後も自走可能な物的インフラとしての基盤を確立している。さらに、本事業の運営体制は、事務局 2 名、各社でヘルプに入るコアメンバー 5 名、外部専門家 5 名、そして外部協力者 200 名以上という体制で実施され、これにより人的コストを最小限に抑えつつ、多様なプログラムの効果的な推進が可能となっている。

各プログラムは、行政、企業、個人事業主など多様なパートナーとの連携のもとに運営され、地域住民やボランティアの協力を積極的に活用しているため、単独の取り組みでは発揮しにくいシナジー効果が生まれている。

例えば、広報媒体「季刊 MIMIZU」の作成、発行においては、本事業を通じて地域内でライティング、デザインができる人材と出会い、対話、連携を深めたことにより、通常外部機関に発注すると高額な仕事を、地域内人材がそこに取り組むことで、費用対効果の高い広報体制を構築することができた。

一方で、現状においては、細部の運営プロセスにおいてさらなる最適化が求められる点も指摘されている。例えば、各プログラム間の連携強化や、広報手法の一層の工夫により、より効果的な参加者の集客やアウトカムの定量的評価が実現されれば、事業全体の効率性はさらに向上するであろう。

総じて、本事業は、既存の地域資源と多様な人的ネットワークを最大限に活用し、限られた予算内で社会課題解決に直結する成果を創出する効率性の高い運営モデルであると評価される。

8. 成功要因・課題

本事業における成功要因および課題は、変化の主体である各ターゲット層の動向を詳細に分析することにより浮かび上がっている。

(1)【生き方や働き方に悩む地域の若者】

当初の目標に対し、事業実施者とのフラットで創造的な対話を通じ、自発的に地域のプロジェクトに参加する若者が増加した点が大きな成果である。

わけしょが「問い会」を企画し、参加者が地域の仕事に興味を持つ流れが生まれたこと、またファシリテーター養成プログラム実践編において、若者自らがイベントの企画から運営までを体験する機会が提供されたことは、若者が自らの強みを発見し、地域の変革の担い手となる好循環を生み出したと評価される。しかしながら、当初目標として掲げた20名には達しなかった点は、個々の成長に要する時間の長さや、まだ変化への躊躇いが残っていることを示しており、さらなる支援とフォローアップが求められる。

(2)【新たな学びの場を求める子ども】

TANQの子どもを対象とした地域資源を活用したワークショップや学習プログラムを通じ、子どもたちが地域の大人と交流しながら自らの関心を育む環境が整備された。

参加者へのヒアリングから、子どもたちが自発的に学びのテーマを見出し、実践的な活動に取り組む姿が確認された一方で、定量的な成果としての回答数は目標値に達するまでには至らず、より効果的な情報発信や参加促進策の検討が今後の課題である。

(3)【地域の創造的な対話の場】

事業実施者と若者、子どもたちとの間で対話の機会が数多く創出され、従来の閉塞的な環境に新たな風を吹き込む結果となった。

具体的には、ファシリテーター養成プログラムや子どもを含めた各種ワークショップにおいて、参加者が互いの意見を尊重しながら活発な議論を行い、地域課題の解決に向けたアイデアが生まれている。

目標としては一定の対話機会を創出することが掲げられていたが、実績としてはその半数にとどまったものの、参加者の質的变化は顕著であり、今後さらなる機会創出が期待される。

(4)【地域資源】

旧土屋邸などの遊休資産を単なる空き家として捉えるのではなく、共同加工所や地域事業者の活動拠点として再生する取り組みが成功した。これにより、地域内の資源循環が促進され、地域経済への波及効果も現れ始めた。

しかし、これらの取り組みの成果を外部に十分に発信する仕組みは未だ整備途上であり、定量的な評価指標のさらなる充実が望まれる。

(5)【関連企業】

大企業との共創プロジェクトにおいて、地域コーディネーターとして若者が参画するなど、従来は個別に取り組まれていた案件が、地域内の有機的な連携によってチーム受注される形で実現した。これにより、単独では難しかった案件が、地域全体のネットワークを活用することで受注可能となり、地域経済への貢献が確認された。

しかし、関連企業との連携はまだ初期段階であり、今後はより多くの企業との協働によって、さらなる案件獲得や連携の深化が必要である。

【行政】については、個々の行政職員が本事業に賛同し、後援や委託事業として生きがい創造事業、デジタル教育推進事業、有機農業推進事業、ワーケーション事業などで連携が進んでいるが、組織全体としての変化は依然として緩やかである。これは、行政という大きな組織において、急激な変革が内部の軋轢を生むことへの慎重な対応が求められるためであり、今後も時間をかけた内部変革の促進と、粘り強い伴走支援が必要であると考えられる。

総じて、本事業は、若者や子ども、地域の事業者、企業、行政といった変化の主体それぞれが、自らの立場で主体的に行動する好循環を生み出すことに成功した。

しかしながら、若者の完全な自律や行政全体の変革、そして関連企業との連携拡大といった点については、今後の課題として残されている。

これらの成功と課題の両面を踏まえ、持続可能な地域循環再生経済の実現に向けた更なる取り組みが求められるのである。

9. 結論

(1) 社会的インパクト評価の構成要素別自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
ア 課題やニーズの適切性				○	
イ 事業設計の整合性				○	
ウ 実施状況の適切性				○	
エ 事業成果の達成度					○

(2) 自己評価の判断根拠について

本事業においては、『みみず』的人材の育成とその実践的な活動を通じ、地域課題の解決や地域循環再生経済の創出を目指すというビジョンを掲げてきた。

これまでの取り組みを振り返ると、農作業や古民家再生、ファシリテーター養成プログラムなど、さまざまな場で多様な主体が交わり合い、各自の得意分野や関心を活かして地域に貢献する流れが確かに生まれつつある。若者が主導して立ち上げたわけしょの活動や、大企業との共創プロジェクトをきっかけとした副業・就労機会の創出などは、本事業のもたらす社会的インパクトを具体的に示す好例と言える。

一方、地域を変革するという観点で、行政という大きな組織の変革や、本事業で蓄積されたノウハウをさらに体系化し、他地域へと横展開していくための取り組みには、まだ十分な時間と労力が必要であると感じられる。

組織の大きさゆえの慎重さや、地域住民・関係者の多様性から生じる課題が残るものの、本事業を通じて築かれた人材ネットワークと相互信頼は、今後の継続的な発展を下支えする重要な要素である。

社会的インパクト評価の観点から見ても、課題やニーズの的確な把握、事業設計の整合性、実施状況の適切性、そして事業成果の達成度については、総じて一定の水準に達していると自己評価している。

ア 課題やニーズの適切性について

全国の山間地において同様な課題やニーズを抱えている中で、本事業において掲げた課題については地域においてやはり同様の思いを感じておられた行政、企業、個人、特にターゲットとなる子どもや若者からの共感性を得る内容だった。

イ 事業設計の整合性について

設計したロジックモデル(図 2、3)に基づいて俯瞰的に事業を行った結果、目標としたアウトプット・短期アウトカムを得ることができた。

ウ 実施状況の適切性について

多岐にわたる活動を行う中で、課題に共感する個人、外部団体などとのつながりが生まれ、目標を上回るアウトプットを生み出したものもあった。

エ 事業成果の達成度について

数多くのアウトプットに支えられたアウトカムが発現している。定量的には当初目標としていた数値に達していない項目もあるが、本事業が目指した5つの短期アウトカムがそれぞれ発現しており、既に中長期アウトカムである「子どもや若者を中心とした地域の次世代を担う人材が、活動(仕事・楽しみ)を自らの力で創出し、IターンUターンする人が増え共に自然や人との関わりの中で地域の文化を更新していく」段階に進み始めていることから、当初の想定した水準以上に進んでいると考慮する。

ただし、具体的な定量データの「見える化」や、伴走型支援のさらなる深化、そして地域外からの多様なリソース導入といった点においては、改善の余地を残しているのも事実である。

これらの判断根拠としては、参加者のアンケート結果やヒアリング、各種ワークショップや合宿の運営実績、さらには地域企業や行政との連携状況など、多角的なデータと事業関係者の声を総合的に勘案している。

本事業を通じて得られた成果や学びを、いかに今後へとつなげるかが次の大きな課題となる。特に、育成された『みみず』的人材が事業終了後も地域課題に主体的に関わり続けるための環境整備や、行政・企業・地域住民が相互に協力しやすい仕組みづくりが求められている。

これらの取り組みを一層進めることで、地域循環再生経済がより強固に根付き、本事業のビジョンである「多様な人材が活躍し、持続可能な地域経済を支える」姿が、飯綱町のみならず全国の地域へ広がる可能性を大いに秘めていると考える。

10. 本事業で取り扱った活動を発展させるための提言

本事業は、内省と問いの発見を起点とした『みみず』的人材育成手法を通じ、単にカリキュラムを提供するだけではなく、価値創造と課題解決の実践プロセスを支援することで、参加者が自らの成長と共に実践事例を創出し、地域全体が変化していくことを実証した。今後、我々みみずやは、飯綱町における地域循環再生経済の担い手として、既存の成功事例や改修施設の運用実績を基盤に、より実践的かつ横展開可能な手法として、次のステップに進む必要がある。

まず、自団体が地域変革の中核となるべく、旧土屋邸などの改修施設に関する運用マニュアルや成功事例集を体系化し、他地域への展開を視野に入れた情報発信基盤を確立することが求められる。これにより、地域資源の再生利用と内省による人材育成のサイクル、すなわち土の中の成長から土の上の成長へと至るプロセスが、都市と地方の価値交換を基盤とする人的リソースの提供と連動し、拡大発展サイクルを生み出すモデルケースとして確立されたいと考える。

また、従来の一方通行のカリキュラム提供ではなく、実践の過程を支援することにより参加者が自発的に問題に取り組み、対話と共感を通じて人材が育成されるよう、複雑な課題に対する多面的な解決策が生み出される環境づくりが必要である。具体的には、DIY ワークショップやファシリテーター養成プログラムを定期的なイベントとして継続し、参加者同士が自己評価やフィードバックを通じて経験を深く共有できる仕組みを構築する。また、地域住民、行政、企業、教育機関との連携を強化するため、定例会議やワークショップ、オンラインプラットフォームを活用した情報共有の場を設け、双方が混ざり合う体験の中で、ざっくばらんな対話を促進することが求められる。こうした連携は、都市のリソースを地域に取り込み、外部から消費を呼び込むことで、地域循環再生経済の基盤となる経済の拡大再生産を促すとともに、人的リソースの提供と相乗効果を生み出す原動力となる。

さらに、実施体制と組織基盤の強化にも取り組む必要がある。現行体制を基に、ICT の活用やオンラインツールの活用を進め、各プログラム間の連携を一層効率化することで、事業の全体運営が迅速かつ柔軟に対応できるようにする。また、助成金終了後も持続的な活動が可能となるよう、業務受託や自主事業、さらには行政補助金や企業スポンサー、クラウドファンディングなど多角的な資金調達手法を検討し、安定した財源の確保に努めることが不可欠である。

以上の提言は、実践過程で生まれた具体的な成果や、都市と地方の価値交換を促す人的ネットワーク、そして内省と対話による多面的な成長を基盤として、地域のあり方が大きく変わりつつある現状を踏まえたものである。我々は、これまでの経験を等身大に評価しつつ、現実的かつ実践的な手法をさらに深化させ、飯綱町発の地域循環再生経済モデルを全国へと普及させるため、今後も土の上と土の中の成長サイクルを着実に回しながら、地域全体の発展に寄与していく所存である。

11. 事業からの学び・知見・教訓

本事業を通じ、私たちは地域資源の活用と内省を起点とした人材育成が、従来の単なるカリキュラム提供に留まらず、実践と対話を伴うことで、地域課題解決と価値創造に直結する有効な手法であることを実感した。飯綱町という、全国的にも過疎化や経済停滞が指摘される地域において、大規模な設備投資や経営基盤に依存せず、限られた資源で実行可能なモデルが提示された点は、私たちにとって大きな学びであった。

まず、事業を推進する中で、参加者自身が内省と問いを通じて自らの本質に気づくプロセスこそが、単なるスキル習得の枠を超えた成長を促す鍵であるという知見を得た。これにより、土の中の成長としての自己回復が、地域資源の発掘や価値再定義、対話と共感の醸成といった土の上の成長に直結し、結果として各種実践事例が生み出される好循環が形成された。これは、従来の「提供→終了」というカリキュラム型のアプローチとは一線を画すものであり、実践の過程を重視した人材育成モデルとして、成果と課題の両面を明確に示している。

また、都市と地方の価値交換を基盤とする人的リソースの提供が、地域循環再生経済の拡大再生産に寄与する可能性を持つことも大きな収穫であった。具体的には、都市からの専門家や企業が、飯綱町における実践活動を通じて地域の課題解決に参画する事例が現れたことで、従来の固定的な枠組みを超えた柔軟な連携が可能となった。これにより、地域内での価値創造と外部からの消費の呼び込みが、持続的な発展サイクルを生み出す原動力となるとの教訓を得た。

さらに、本事業の推進には、伴走支援の重要性が再認識された。資金分配団体である長野県みらい基金から派遣されたプログラムオフィサー轟氏の存在は、単なるサポートに留まらず、時にペースメーカーとして、あるいは先導者として活動を加速させる効果をもたらした。こうした支援体制の存在が、目標設定とその達成に大きく貢献したことは、今後の事業運営においても大変参考になる。

これらの学びは、私たちが今後も持続可能な地域循環再生経済モデルを追求し、地域住民が主体的に参加する新たな「村社会 2.0」を実現するための基盤となる。参加者同士が互いに混ざり合い、ざっくばらんに対話する環境の中で、従来の凝り固まった枠組みを打破し、多面的な視点から課題を解決する重要性を痛感した。こうした経験をもとに、私たちは実践事例を評価し、今後も内省と実践を融合させた人材育成のプロセスを磨き続けるとともに、全国の同様の課題を抱える地域に対して、具体的かつ実践的なフィードバックと支援を提供していく所存である。

総じて、本事業の成果とその過程で得られた知見は、地域資源の再生利用、内省に基づく人材育成、都市と地方の価値交換、そして伴走支援による実践活動の重要性という、複雑性の高い地域課題に対する新たなアプローチを示している。これらの教訓を今後の運営や連携強化、さらには全国展開のモデルケースとして体系化することで、持続可能な地域発展に寄与する実践的な知見として、私たちは次のステップへと進んでいくことができると自負している。

12. 資料(別添)

- 「みみず」的人材ヒアリング内容(4名)
建築家 小松剛之さん「ローカルらしい建築家像」
フリースクール保護者／個人事業主 小島敬さん「見出した納得のいく働き方」
りんご農家 小林徹さん「こだわりをかたちに」
ツチクラ住建 西村啓大さん「絶妙なおせっかいで地域課題の解決を後押し」
- 問い会 開催レポート vol.1～6
Vol.1 一年前の今日のこと覚えていますか? 「日記」から考える、自分との向き合い方
Vol.2 寂しさや孤独とみんなはどう付き合ってる?
Vol.3 自分をご機嫌にしてあげる方法って?
Vol.4 僕が旅に出た理由
Vol.5 頑張りたいけど頑張れない日もある。みんな今、どう働いてる?
Vol.6 私はわたしのことどれくらい知ってる?
参考 URL https://note.com/toikai_wakesho
- 季刊 MIMIZU (Vol.1～4)
- みみずや共同加工所お披露目会 プレゼン資料
- 超異分野学会 東京大会 2025 ポスター発表資料